



野口英世記念・米国財団法人 野口医学研究所
創立30周年記念誌





野口英世と野口医学研究所

30年の歩み

私たちが
目指すのは、
命を守る医療人の
国際化です。

野口医学研究所は、日本の生んだ世界的医学者・野口英世博士の偉業を記念し、国際医学交流促進を目的に1983年アメリカ政府の承認のもと、フィラデルフィア市に設立された米国免税財団法人です。世界最先端の医学、看護学、歯学および薬学に関わる共同研究開発や、日米双方を初め世界中の医師・看護師・医学生の交換留学システムを確立しその資金援助を行うなど、各国間に亘る国際医学交流の重要な拠点となっています。また、近年に至り臨床医学交流に加えワクチンの共同研究開発、発展途上国への医師派遣を含め世界中何処でも利用できる24時間対応の電話医療相談サービス「ドクターホットライン[®]」の提供、日本人医師による海外での「人間ドック[®]」サービス網の充実など、コスモポリタン医療の確立にさまざまな形で貢献しています。最も新しい活動として、研修・研鑽により完成された医療スタッフやコ・メディカルスタッフがその成果と実力を発揮できる病院を選び改良を加え、「ホスピタルサバイバル」を標語として患者優先のチーム医療が実践できる医療施設の普遍化を目指しています。



創立30周年記念誌 — 目次 —

■ご挨拶	p4-
浅野 嘉久（野口医学研究所 創業者・名誉理事／一般社団法人野口医学研究所 社員総代） Joseph S. Gonnella（野口医学研究所 評議員／トーマスジェファーソン大学 名誉医学部長）	
■今後の「野口」-将来への展望-	p9-
佐藤 隆美（野口医学研究所 評議員会会長／トーマスジェファーソン大学 腫瘍内科教授） 町 淳二（野口医学研究所 理事長／ハワイ大学 外科教授）	
■祝辞	p15-
日野原 重明（聖路加国際病院 理事長） 平田 亮（野口医学研究所 専務理事／ひまわりファミリークリニック 院長） 蓮見 賢一郎（野口医学研究所 評議員／米国法人蓮見国際研究財団 理事長） J. Michael Kenney（野口医学研究所 副筆頭理事） Jerris R. Hedges（ハワイ大学医学部 Dean and Professor of Medicine） Satoru Izutsu（ハワイ大学 Vice Dean） Charles A. Pohl（トーマスジェファーソン大学 副学部長 小児科教授） 香川 芳子（学校法人香川栄養学園 女子栄養大学 学長）	
■30周年に寄せて	p25-
澤田 崇志（野口医学研究所 評議員会副会長／一般社団法人野口医学研究所 社員・顧問） 鶴田 曜三（野口医学研究所 評議員会副会長／医療法人隆徳会 理事長） 津田 武（野口医学研究所 評議員／トーマスジェファーソン大学 小児科准教授） 佐藤 俊彦（野口医学研究所 常務理事／野口記念インターナショナル画像診断クリニック 院長） 佐野 潔（野口医学研究所 常務理事／徳洲会地域家庭医療総合センター センター長） 羽村 章（野口医学研究所 常務理事／日本歯科大学 生命歯学部長）	
■30周年に寄せて（続き）	
加我 君孝（野口医学研究所 常務理事／東京医療センター 感覚器センター 名誉センター長） 渡辺 和夫（野口医学研究所 筆頭理事・倫理審査委員会委員長／千葉大学名誉教授 元薬学部部長） 正木 清彦（野口医学研究所 監査役・倫理審査委員会副委員長） Doric Little（ハワイ大学 Associate Professor） 神保 真人（野口医学研究所 理事／ミシガン大学 家庭医療科准教授） 師田 信人（野口医学研究所 理事／国立成育医療研究センター 脳神経外科） 鈴木 真奈（野口医学研究所 顧問／一般社団法人野口医学研究所 社員・顧問） 安井 一正（野口医学研究所 参与会会長／西マックスネットワーク 代表取締役） 安東 恭助（野口医学研究所 参与会会長／医療法人社団ココニコクラブ 理事長） 藤谷 茂樹（東京ベイ・浦安市川医療センター[野口英世記念・野口国際医療センター] センター長） 金城 紀与史（沖縄県立中部病院 内科） 吉新 通康（公益社団法人地域医療振興協会 理事長）	
■「野口」のあゆみとセミナー開催史	p56-
■留学体験記	p61-
笠原 毅弘（野口医学研究所 理事／Diplomate of the American Board of Oral and Maxillofacial Surgery） 岸田 明博（札幌手稲漢仁会病院 外科） 阪下 和美（岐阜大学 医学教育開発研究センター） 筒泉 貴彦（練馬光が丘病院 内科レジデントプログラムディレクター） 北野 夕佳（聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 救命救急センター） 堤 美代子（聖路加国際病院 一般内科）	
■財団「野口」の活動を支える社団「野口」の事業	p71-

野口医学研究所 30 周年記念に問う、



米国財団法人野口医学研究所 創立者・名誉理事
一般社団法人野口医学研究所 社員総代
浅野 嘉久

先ずは無事に 30 周年を迎えることが出来、心の底から快哉を叫びたい。

人には数多くの邂逅と別離がある。

私の自覚は名古屋市に在る、汐路中学校の神田史郎師が私へ与えた“浅野、お前はお人好しだから他人に騙されない様にせよ”から始まる。随分と騙され利用された記憶と、私が騙してしまった記憶が入り交じる。

昭和 39 年 1 月から 40 年 6 月までの、僅か一年半だけの東京大学医学部との邂逅が私の運命を大きく変えた。

そこで出会った吉川春寿先生、米山良昌先生、浅倉稔生先生、そして香川栄養学園女子栄養大学現学長の香川芳子先生…。この出会いこそ、野口医学研究所と東京大学並びに女子栄養大学との太い絆の原点であると言える。

東大での研修を終えてから 17 年の時を経て、浅倉先生との再会を機として野口医学研究所への深い関わりが出来た。39 歳の時である。

今年で 71、地獄か天国かは分からないが、何れかの使者の終焉を告げる聲が時々耳に聞こえる歳になった。

野口医学研究所は画期的理念を持っていた。

今でこそ医局の崩壊だとか、どんなシチュエーション、如何なる医療 Needs でも初期対応の出来る医者（敢えて“医師”とは言わない。ジェネラリ

スト⇔ドクターG…“医者”がピッタリだから）を育てることが、恰も新しい波の様にもはやされている、しかし、「野口」ではどうの昔にそれを目指していた。

てっとり早く言えば、米国の医学・医療がそれであったから…。

また言い替えば、患者優先の医療、ER から産科まで初期治療を独りでこなせる医者を作ることこそが医学教育そのものだという信念である。日野原重明先生、杉村隆先生、Joseph S. Gonnella 先生並びに鬼籍の人になられたけれど牛場大蔵先生、草川三治先生と尾島昭次先生、また少し遅れての参画であるけれど 95 歳で亡くなられるまで、宮々と蓄えられた遺産を「野口」へ遺し逝かれた天野景康先生、そして主宰、浅倉稔生先生らは実に偉大であり、偉かったと思う。

そう、今から三十数年を遡る、

徒手空拳、手弁当で集い、現在の「野口」の礎を創った先人達の立派な“先見の明”と言えるのではないだろうか。

“愛染かつら”の時代に育った私の、初めて見る米国医療の現場は新鮮などという生易しい言葉では言い表せないものであった。

聴診器を首に掛けている人は皆、医者だと思っている私には、出会う人、出会う人、全てが医者ばかり、その数の多さに驚愕する。浅倉先生（当時、ペンシルバニア大学・小児病院＝CHOP の教授）からそれが看護師だと聞かされ、更に驚きを覚えたのである。



自分自身の目で確かめ、浅倉先生から教えられた米国の医学・医療の実態、その一つひとつが頭を殴られるような衝撃であった。

- ① 米国には日本の医局制度などは存在しない。
- ② 米国には専門馬鹿の医者は居ない。
- ③ 医療人（Medical Staff、Co-medical Staff、Para-medical Staff）は皆夫々に誇りを持ち、目に見える差別はない。
- ④ 臨床とリサーチがハッキリ分かれており、臨床の収支とリサーチマネー（NIH、Chair、Private Fund、他）とは明確に区別されている。
- ⑤ 患者は、自分が受ける医療に対する決定権を持っており、医者がチームリーダーとなり、看護師、薬剤師、RT（レスピレトリー・セラピスト）、管理栄養士、そして MSW（メディカル・ソーシャル・ワーカー）らを取りまとめ、チームが一体となって、その患者が選んだ治療に当たる。須らく医療人には対等の関係、平等の意識、これが一番大切なのであるということ。

数え上げれば限が無い、

後になって、「野口」現理事長の淳二から改めて学んだ事がある。ハワイ大学医学部外科の教授である町淳二先生は、「Yoshi、僕達外科医にとって管理栄養士は不可欠のパートナーで、安心して術後管理をバトンタッチ出来るのは、彼ら、彼女らが居るからなのだよ」と言われ、改めて浅倉先生の言葉を思い出す。

未だに日本では管理栄養士が給食のおばさんと呼ばれている現場も多いというのに…。

昔の“お医者様”は、その幻想と創られた偶像に便乗して、ただ黙って注射を打ち、薬を出すだけで善かった。

世の中には医は仁術という観念が深く根付き、医者には常に全人格が求められ、現実の医者の実力は万能とは程遠いのに、患者は更に“赤ひげ医者”を期待し、讃える。

つい最近、こんな出来事を耳にした。

今も続いている、「野口」ドクターホットライン® サービスは 1990 年初頭に私が始めたものだが、24 時間 365 日、世界中に誇り、当初は神保真人先生らが頑張ってくれ、大変好評を得たものである。唯、昼夜を問わず電話が掛かって来る為、到頭最後には神保先生の家族から、眠れない、と強くお叱りを受けたのを今でも時々思い出す。

最近、そのホットラインへある患者から掛かってきた訴えは、

40 歳を僅かに越えたくらいの医者に、診察の後、患者が病名と治療の行方を聴いたら、“病名!? 薬!? 聞いて分かるのか!?”と言われたというのだ。

もしもこれが米国の何処かで起きたなら、大問題に発展するだろう。

こういう未熟児医者の居る限り、我々の使命は終わらず、永遠に続く。

未だまだ道は遠いのである。

とまれ、この 30 年は山あり谷ありの激しく険しい道程であった。

いま思うのは、津田武先生、佐藤隆美先生と佐野潔先生、音信不通ではあるけれど、幡生寛人先生と青山剛和先生らとの黎明期の苦勞、後になっての参加ではあるが、「野口」のプレステージを飛躍的に上げてくれた、町淳二先生、平田亮先生、佐藤俊彦先生、羽村章先生、そこに集う若き後継者達、藤谷茂樹先生を筆頭に植田育也先生、師田信人先生、笠原毅弘先生、そして大切な縁の下の力持ち、事務方を支えてくれた、澤田崇志氏、J. Michael Kenney 氏と鈴木真奈さん、これらに加え、「野口」Alumni には現在千人を超える若き医者達が馳せ参じ、名を連ね、「野口」に係る数々の Program & Event を実行している。

現在、米国財団法人野口医学研究所、NPO 法人野口医学研究所の、Academism & Pragmatism の実践を可能ならしめる財政は、一般社団法人野口医学研究所が一手に引き受け支えているが、此処までの道程は決して生易しいものではなかった。かつて「野口」が厳しい経済的危機に面した時、一言の文句も小言も言わず、大金の拠出をした、蓮見賢一郎先生と鶴田曜三先生…、この二人の存在が無ければ、「野口」は確実に雲散霧消していたに違いない。

この頃では、その一般社団「野口」が一銭の寄付も頂かず、唯々、Medical Business 一本でお金を捻り出し、「野口」幹部の天衣無縫の Disk-Jockey を可能ならしめている。



上野公園内に建立された野口英世像の台座に刻まれた言葉『Pro Bono Humani Generis.』
(全ては人類の為に)

実に世の中は口さが無く、色々とやかく言う人達が大勢いるが、“やれるものならやってみるが善い”と呟き続けた 30 年でもあった。

閑話休題：

今、「野口」は独自の NKP (野口研修プログラム) なるカリキュラムを開発し、この全国展開を図っている。これこそが過去 30 年間に亘り、「野口」が培ってきた珠玉のプログラムで、「野口」の集大成と言って良いものであろう。

ありがとう皆、これからの世紀は“その”「野口」の Legend & Lore (伝統と伝承) が重要な仕事になる。

Bon Voyage!

2013 年 12 月 7 日

浅野 嘉久



病める者の痛みとその希望を共有できる真の医療人に捧ぐ、野口英世の栄光と挫折、姿見えぬ微生物と闘った長い道のり、そして余りにも短か過ぎたその一生、彼の功名心は、人類を救わんとする情熱の、ほんの片隅にあったものと信ずる。

米国財団法人 野口医学研究所
創立者 名誉理事
医学博士 浅野 嘉久

野口国際医療センターに設置された野口英世博士胸像の銘板に記された言葉→

30th ANNIVERSARY OF NOGUCHI MEDICAL RESEARCH INSTITUTE: ANOTHER MILESTONE



米国財団法人野口医学研究所 評議員
トーマスジェファーソン大学 名誉医学部長
Joseph S. Gonnella

Introduction

Medical education is an international experience. The sharing of medical knowledge is as old as the profession itself. What happens to one nation will, in some way, ultimately affect the rest of the world. Viruses and bacteria spread and attack without regard for national boundaries, as today's global concern for Hepatitis B and C, the autoimmune deficiency syndrome (AIDs) and drug resistant tuberculosis will attest.

Mutual Benefits of International Education

We in the United States have directed our energies to expanding medical knowledge, medical technology, and training of international physicians in the hope that these efforts will culminate in a healthier world. Our schools and hospitals have helped educating many foreign physicians. In the recent past, we have witnessed many foreign physicians complete graduate medical education in the United States and return to their native lands to establish training programs, clinics and hospitals. We know, in general, the benefits derived by developing nations, but rarely have asked ourselves what we get from our participation in international education. Let us not forget, teaching is a learning experience. So it is in international education. When a developing nation no

longer depends on, but functions actively as an integral part of, the collective world community, the full richness of shared discovery is realized. In a global sense, the goal of international education is mutual exchange of ideas and a sharing of cultures.

Reciprocity in International Sharing

When we speak of international exchange it has largely been one-way. True reciprocity has been lacking. Too often we interpret such exchange to be “technology transfer.” Yet, technology is a means and not an end.

In all countries the selection of medical students, the design of medical curricula, the evaluation of medical students and residents, the assessment of physicians' performance, and the evaluation of health care are issues generating controversy. In the absence of scientific evidence, most debate is based on subjective opinion. To clarify these issues and to document to society the value of our educational programs, data must be collected at many points during the journey through medical education. Those of us who are responsible for educational and health care programs must consider these as experiments. Hypotheses should be stated and tested in different settings or countries. Collaborative studies are needed. Changes should be introduced only when

costs/benefits have been proven or at least considered. The benefits of this approach are:

- Faculty and students will learn that the scientific model can be applied in education;
- The contribution of the physician will be placed in its proper perspective.

Research on the question of how to select the best medical students should take into consideration many factors. It is insufficient to study only the relationship between admissions predictors and performance in the basic sciences. Although such research meets the needs of faculty, it does not address the larger and more important social concerns. Collegial creativity and hard work are required to conduct longitudinal studies of large groups of students to link pre-medical factors with meaningful postgraduate long-term outcomes.

The founders of the Noguchi Institute believed in these concepts and committed their energy and money to foster new programs between Japan and the U.S.A. We need to be particularly grateful to Drs. Asano, Amano and Ojima for having led us on this journey.

As the celebration approaches I am taking time to reflect on the many accomplishments that Dr. Asano has achieved as the founder of The Noguchi Medical Research Institute (NMRI).

I still remember our first meeting in Philadelphia 30 years ago. Much has happened since then. Many relationships have been made with a number of institutions in Japan. The NMRI has given opportunities to countless young physicians and medical students to visit Jefferson Medical College to understand how medical education works and to help us understand

the professional development of students in Japan.

Now it is time to celebrate and plan for the future.

Joseph S. Gonnella, M.D.
Distinguished Professor of Medicine
Director, Center for Research in
Medical Education and Health Care
Dean Emeritus

References

1. G. Velazquez P. "The Impact on Medical Education in other Countries by Foreign Physicians with Graduate Experience in the United States," in Academic Values in International Medicine (ECFMG 1982, pp. 7-15).
2. Gonnella, J.S. International Exchange: A Shared Approach to the Identification and Solution of Problems in Medicine and Medical Education. Educational Commission for Foreign Medical Graduates 9-12, 1986



野口医学研究所の来し方行く末に思いを紡いで



米国財団法人野口医学研究所 評議員会会長
トーマスジェファーソン大学 腫瘍内科教授
佐藤 隆美

野口医学研究所設立 30 周年によせて、私の所感を述べる前に、これまで 30 年間ずっと野口を支援していただいた方々に、野口を代表し、心から感謝の意を表したいと思います。皆様のただ一人が欠けても、今の野口は存在しえなかったと思います。本来ならば、一人一人の功績をたたえ、一人一人をここに紹介すべきところですが、紙面の都合もあり、それができないことを容赦いただければ幸いです。

「日米の臨床医学交流の推進と、日本の医療の改善」という明確な活動目標を掲げ、多くの人と人との邂逅の中で 30 年の歳月を経て今の野口が築かれてきました。ただ、その道のりは決して平坦なものではなく、時には、純粋に野口に心をよせる方々の切磋琢磨の中で、また時には、私利私欲のために野口に近づいてきた人々との相剋の中で、現在の野口のゆるぎない基盤が築かれてきました。

野口の歴史を語る時、その「起」にあたる部分は、フィラデルフィア小児病院の浅倉稔生教授と野口医学研究所名誉理事浅野嘉久氏との 17 年ぶりの再会であったと思います。かつて東大で師弟関係にあった二人が、「途絶えかけた日米の臨床医学交流を復活する」という理念のもとに結束し、1983 年 6 月にアメリカで非営利財団「野口医学研究所」を立ち上げ、「医療ビジネスで人を助けながら、医学交流の資金を捻出する」という自立型

のユニークな財団経営を展開しました。創成期には、その独自の運営形態から、日本の医療関係者からの理解がなかなか得られなかった時期もありましたが、故尾島昭次前理事長や 前トーマスジェファーソン大学医学部長 Dr. Gonnella の強力な支援のもとで、徐々に財団の運営基盤が確立されていきました。当時の野口は、「24 時間電話医療相談（ドクターホットライン®）」「海外在住の日本人向け人間ドック®」など、海外在住邦人の健康管理を行いながら、若い日本人医師達をアメリカに送り続けました。その後、野口の海外留学システムを通じて臨床研修の機会を得た野口フェロー達を中心となって、1991 年に「野口アラムナイ」が結成され、野口は、「送る側（野口医学研究所）と送られる側（留学生）が一体となって医学交流を推進する」という、ユニークな活動形態を構築しました。年に一度、フィラデルフィアに集まり、お互いの苦労話に耳を傾け、将来の夢を語り合う事で、野口フェロー達の結束は次第に強固なものとなりました。この野口アラムナイの発展に、骨身を惜しまず支援を続けた浅野名誉理事の先見の明がなければ、現在の野口はなかったものと思います。

このような地道な活動を続ける中、野口アラムナイのメンバーにも、アメリカでの臨床研修を修了し帰国する医師達が増え、帰国したメンバーの日本での活動拠点をつくるのが次の課題となりました。時を同じくして、2008 年度末に町淳二ハ



ワイ大学外科教授が野口医学研究所の理事長に就任し、野口の教育理念を実現するためのパートナー探しが始まりました。その中で、野口哲英常務理事の紹介で、地域医療振興協会 (JADECOM) の吉新通康理事長との出会いがあり、野口フェローを中心にアメリカ卒業臨床教育を日本で行う野口研修プログラム (NKP) が発案されました。その後、藤谷茂樹医師の指導のもとで、2010年に東京北社会保険病院で、2011年に横須賀うまち病院で JADECOM-NKP が開始されました。その翌年、2012年の東京ベイ・浦安市川医療センター (Noguchi Hideyo Memorial International Hospital) の開院にともなって、多くの野口フェローの参画が得られ、NKP の教育活動が本格化しました。このプログラムには、現在 60 名をこす研修医が参加しています。この JADECOM-NKP の教育理念は、救急を含めどんな患者が来ても、きちんと対応ができる総合医を養成することです。そして、医療に恵まれない地域においても、世界標準にのっとった医療を提供できる医師を育成することです。

さて、野口がこれまで行ってきた医療、医学教育に関する社会活動の「結」にあたるものは、何でしょうか？それは、アメリカ、日本というような垣根のない医療を、全国津々浦々に広げていくことだと思います。そのためには、ビジネスマインドを身につけた (限られた医療資源の活用ができる)、腕のたつ (それぞれの医療分野で世界に通

じる最高の技能、技術を身につけた)、赤ひげ医師 (常に患者や家族と向き合う医療従事者) を大量生産するシステムを構築することだと思います。そのためには、そのような医療従事者を育てることができる指導者を増やし、また、そのような指導者が、全力を発揮できる施設を増やすことが必須となってくると思います。そして、それぞれの拠点がネットワークが繋がったとき、野口の存在価値がさらに増え、日本の医療、医学教育の改善に向けた大きな推進力になっていくことだと思います。今後は、このような医師たちと協力し、チームを組んで患者の治療にあたる看護師や、薬剤師、栄養士、理学療法士などの専門職の育成が、急務になって行く事と思います。さらに、医師だけではなく、歯科医師の留学プログラムを立ち上げることも、患者のトータルケアの観点から重要な課題だと思います。

最後になりましたが、これまで、野口の理念の実現に向け、家族も、自分の生活も犠牲にして奔走してこられた浅野名誉理事に、また、彼を信じてひたすら働き続け、野口の屋台骨をささえてきていただいた社団野口の職員の方々に、そして、野口の理念を支えるために、損得を考えず支援を続けてきていただいた企業の方々にこの場を借りて深謝させていただきたいと思っております。これからも、皆様とともに、日本の医学教育、医療の歴史の新しいページを書き綴っていただければと願っています。 (2013年11月)

野口の未来・夢 - Noguchi's Vision for Future and My Dream



米国財団法人野口医学研究所 理事長
ハワイ大学 外科教授
町 淳二

“The future belongs to those who believe in the beauty of their dreams.” (Eleanor Roosevelt)

野口英世記念米国財団法人野口医学研究所 (NMRI) は今年 2013 年、創立 30 周年を迎えました。NMRI は過去の歴史とそれによって築かれた基盤・Identity をもとに現在があり、そして未来があります。Past, Present は必須ですが、Future が無ければ Present の意義も無くなります。30 周年にあたり、“Honoring the past and building the future” を目指します。

1983 年創立者の Yoshi 浅野嘉久氏の私財を投げ打っての創成期から、Thomas Jefferson 大学 (TJU) その後 Hawaii 大学 (UH) などとの日米医学交流や国内教育活動は多くの「NMRI の仲間」に支えられてきました。ことに一般社団法人野口医学研究所 (社団野口) などの「野口東京オフィススタッフ」が、ボランティア活動で NMRI の教育活動を喜びと誇りを持って実施下さりました。多くの「野口アラムナイ」がセミナーや後輩育成にサポートし続け、野口アラムナイ登録者は 1,000 人を越えました。アラムナイを結集し 2009 年に創立した「NKP (Noguchi Kenshu Program)」(創立者：藤谷・町) が、2012 年 4 月に東京ベイ浦安市川医療センターで地域医療振興協会との提携で始動しました。未来に向かって NMRI の日本での教育活動を飛躍するために、2012 年 10 月、平田・佐藤 Toshi・澤田らの努力で特定非営利活動法人野口医学研究所 (NPO 野口) を創設しました。

創立 30 周年に当たり、NMRI の伝説 Legend を築いてくださった Yoshi、現在の NMRI 役員になられている方、様々な形で多大な支援を頂いた方、そして何より社団野口の皆さんに心から感謝申し上げます。

私自身も 2008 年 12 月に NMRI 理事長就任以来、本年で理事長 5 年目も終了します。2008 年理事長就任時掲げた「CHANGE!!! Yes, We Can」の基礎は築かれてきましたので、今後の NMRI の方向・Vision、特にその未来・夢を述べたいと思います。

Background

“Medical education never ending, ever evolving.” 医療と共に医学教育も日々進化を続けます。そして、医学教育・医師育成はもう日本国内だけでは語れません。グローバル化 (国際標準を理解し適切に受容する、そして逆に日本からも発信する) は必須で、日本の教育も「開国」せねばなりません。その背景をいくつか列挙すると、

- ・卒前医学教育では、ECFMG が規定した 2023 年度からの USMLE 受験資格としての医学生臨床実習時間のアメリカ LCME (米国医学教育連絡協議会)・国際レベル (約 70 週間という時間数だけではなく実習内容) の必要性。
- ・卒後臨床研修の国際標準化としての ACGME-I (ACGME-International: 米国卒後医学教育認定機構 - インターナショナル) の世界への普及進行。

- ・ 病院の国際標準化としての JCI (Joint Commission International: 米国医療認定機関 - インターナショナル) の更なる進展。
- ・ TPP (Trans-Pacific Partnership) などを通しての医療の国際化の可能性。
- ・ Medical Tourism ばかりでなく、2020 東京オリンピック・パラリンピックも含め日本への Visitors や在日外国人の急増が予想され、24 時間救急も含め英語でも診療対応できる国際病院の必要性。
- ・ 医療・医学教育/研修の開国: 現在のような「研修鎖国日本」のままでは、5-10 年後には日本は医学教育・研修の後進国となる危機。
- ・ 英語教育の必要性: 国際的にも通用する医療人の育成の必要性。
- ・ グローバリゼーションへの対応: 良い面の受け入れとともに、日本の良さの世界への発信の必要性。
- ・ アジアや更には世界のリーダーとなるべく日本の使命。

Mission

NMRI の Mission は、Homepage にも掲げているごとく、

- ・ NMRI Mission: 「命を守る医療人の国際化」; 国際的にも通用する医療人の育成
- ・ そして最終 Outcome としての Mission は、「そのような医療人育成を通して国際標準の医療を日本国内外に提供する」こと。ACGME の基本概念でもある Best Patient Care が最終 Outcome と言えます。



Vision

NMRI の最大の強みと最大の Asset は「人材」、そしてその継続的な育成と結集能力にあります。この NMRI の他に類を見ない(日本国内のどんな教育団体にも出来ない) Unique Value を発展させ、国際的な医療・医学交流と、更に日本国内での教育・研修発展の Strategy を通して、Mission を達成すること。そして、「日本の国際化」の一方で、日本の優れた面を発信し「世界の日本化」も目指したいです。

Methods

現在の医療や教育の上記 Background を熟慮しつつ NMRI の Mission を達成することが、NMRI の未来への道となります。着実な努力を重ねることは当然であります。将来を担う若い力・人材(特に新世代 New Generation) をいかに結集・結束するかが問われます。以下、その具体的な構想をリストすると、

- ・ アラムナイのより積極的な Active Activities (not Passive Activities) の促進: セミナー、海外交流 (TJU,UH など)。
- ・ アラムナイの発展、指導医・講師の充実、若手野口幹部の育成・リクルート。
- ・ 野口オフィススタッフ・社団野口との協力・継続: 一方的な社団野口からの負担は極力軽減し、相互に高めあえる共同組織とする。
- ・ 海外医学交流活動: 学生や研修医の海外研修発展(海外留学先の増強など)、今後は海外からの研修医や学生の受け入れ。
- ・ 国内セミナー活動の更なる展開: 従来の7月のサマーセミナー、12月の医学交流セミナーに加えて、今年開始した一本勝負セミナーや検討中のサーキットセミナー(専門科毎の小セミナー)の具体化。
- ・ NKP: 教育とともに医療提供・Best Patient Care のために野口アラムナイが実践可能; アメリカ ACGME と同等の教育研修を(アメリカに行かなくても)日本で実施できる施設・プログラムを増やす; アメリカ専門医取得者の帰国後の受

け皿ともなる。

- ・ 歯科部門の教育、ナースその他のコメディカル教育の充実。
- ・ TJU,UH、その他の海外(アメリカ)との提携強化。
- ・ アメリカのシステムの日本導入: JCI, ACGME-I、下記のアメリカ医学部分校を通しての LCME など。
- ・ 最後にしかしもっとも重要な課題の一つとして財政的・人的基盤の安定化: NPO 野口の活動強化と公的活動を通しての認定法人化・公益化。

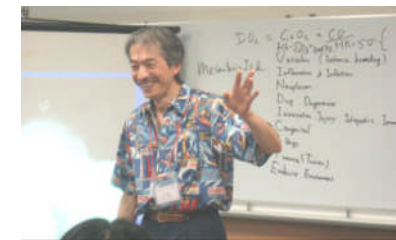
Twitter

ここで私見を一言: モノにもヒトにも、常に相反二局面があります: 『善悪』『良悪』『明暗』『陽陰』『楽苦』『楽悲』『表裏』『光影』『ポジネガ(Positive-Negative)』。そして、モノ・ヒトをどう見るかには個人差があり、それを他のヒトには強要できませんし、その見方のどちらが『正誤』かも状況次第で分かりません。ただ、上記の前者(『善』『良』『明』『陽』『楽』など)志向は個人の前進にも、さらに周りのヒトへの影響でも Positive に作用するという事です。(病気の治療において患者のこの様な志向が予後にも影響することは証明もされた事実です。)これは特に、モノ事やヒト関係がうまくいっていない(悪い)時に重要です。どんなに悪いモノ・ヒトでも必ず相反面(すなわち良い面)があるはずで、それに視点を変える(Positive に捉える)ことで気持ち・気分・思考・姿勢・行動は変えられ、そうすることで周りのヒトのそれらも変えられる、モノが好転すると信じます。要はモノ事もヒトも見方次第ということで、あえてここに記す様なことではないのですが、NMRI で私が今後仕事をさせていただく上での私の性格・姿勢です。

こんな性格は、いろいろな危機を乗り切ったり、夢を諦めないためには役立っているのでしょう。私は「樂觀主義者」「性善説者」「楽道家」「極楽XXX」などと思われておりますが、それも受け取り方次第で Positive に解しています。ヒト・モノ

の良いところを見つけるのが得意です。そして決してヒトの意見を聞かないわけではなく、むしろヒトから日々学ぶことに努めています。私が私であるのは今まで私に教えてくれたヒトのお陰で、そうして下さった NMRI の多くのヒトたちに感謝いたします。

I am who I am because of you all.



閑話休題(このことは Yoshi から教わりました)

夢そして未来

以上の Background や Vision を持って、私の志向・指向する夢・未来は、

- Noguchi Medical School: USA (UH) Medical school Noguchi Branch in Tokyo (ハワイ大などアメリカ医学部野口東京分校)の可能性: 日本の医学教育改革への貢献と、育った人材の世界的展開。
- 野口国際教育病院: NKP 活動の発展。
- 日本の教育・研修制度のスタンダード化・グローバル化。
- NMRI・NKP が Role Model となることで鎖国状況の「日本開国」を社会・国家にアピール。
- 「日本開国」を通して、ACGME-I ともなどと協力し、アジアの教育・研修のリーダー。更には、世界での医学教育・医療でのリーダーシップ。

NMRI の理事長としては地に足が着いた着実なリーダーとしての言動をすべきですが、私個人としてはあえてゴールや夢は、あえて高く掲げたいです。



“The great danger for most of us is not that our aim is too high and we miss it, but that it is too low and we reach it.” (Michelangelo)

NMRI は過去から現在まで多くのことを成し遂げてきました。しかし、そのことにあぐらかきそれに固執しては未来はありません。

“I never see what has been done; I only see what remains to be done.” (Marie Curie)

では、NMRI の未来はどうなるのでしょうか、予測できるでしょうか？その答えは、

“The best way to predict the future is to create it.” (Peter Drucker)

そう、NMRI の未来は創りだすものです。私は夢ばかり見ているといわれますが、自らの夢を天空に大きく描きつつ、皆様のご指導ご援助のもと、その夢の実現に向かって NMRI の未来を創り上げていきたいです。今後も皆さま、よろしくお願い申し上げます。

2013 年 12 月吉日



野口医学研究所創立 30 周年記念誌への寄稿



聖路加国際病院 理事長
日野原 重明

今般、米国財団法人野口医学研究所並びに一般社団法人野口医学研究所が、創立 30 周年を祝して、「野口医学研究所創立 30 周年記念誌」を発行されるにあたり、この機構の発足当時から役員の一員として関与したものととして、非常な感動をもって、この行事に祝意を送りたいと思う。

この法人はもともと米国フィラデルフィアにおける野口医学研究所の発足にその源をさかのぼるが、これには米国財団法人野口医学研究所の創立者であり、名誉理事の浅野嘉久博士と、現在ハワイ大学医学部教授の町淳二博士の絶大な努

力による成果として生まれたのである。

特に町博士は米国ジェファーソン大学医学部の名誉医学部長 Joseph Gonnella 博士の指導を受けて、日本の浦安市に新総合病院を発足させ、将来日本における米国式の医学校を目指す目標で献身的な努力を捧げてこられたのである。

私は、今日米国財団法人野口医学研究所が創立 30 周年を迎え、その記念号の発行に際して、私に寄稿を依頼したことに深く感謝して、これに応じた次第である。

<「野口」主催による日野原先生特別講演会>



<野口ゆかりの医師・関係者が執筆した日野原先生の推薦本>



高い志をもった野口医学研究所の 30 年



米国財団法人野口医学研究所 専務理事
ひまわりファミリークリニック 院長
平田 亮

米国財団法人野口医学研究所創立 30 周年心からお慶び申し上げます。

私が初めて浅野嘉久名誉理事にお会いしたのは今から 25 年以上前のことになります。

私は個人的な理由により臨床研修ではなく、米国でのリサーチフェローを希望しており、私の申し出は即座に却下されると思っておりましたが、意外にも『志がある者は、とにかく米国に行って勉強してきなさい!』と暖かいお言葉を頂き、浅野氏の推薦によりサウスカロライナ医科大学小川真紀雄教授の下で約 3 年間血液学の勉強をさせて頂きました。在米中は血液学の勉強だけでなく、オブザーバーとして大学内の各種会議に出席しコメディカルとの役割分担における日米の違いに驚き、また開業医のグループ診療システムも貴重な体験となりました。

野口医学研究所の医学教育支援は、日本と外国の医学交流、医師・医学生のみならず歯科医師や他の医療従事者の海外研修支援、医学教育プログラムの実施等多岐に亘り、海外研修者支援事業に限っても毎年 30 名を送り出しており、年間の総予算は 5,000 万を超えています。その財政的基盤は一般社団法人野口医学研究所からの一方的な援助で成り立っており、その構図は 30 年間基本的に変わっておりません。創立者浅野氏の方針は、『寄付による運営は必ず寄付者からの外圧が出てくることや寄付金の集まりは社会情勢に左右され、安定した組織運営が不可能である。』であ

り、寄附金には一切頼らず、一般社団からの金銭的・人的支援によって運営されています。また『“人生いろいろ”なので、支援した人に対する見返りは求めない。感謝して、研修終了後我々の活動に共感し協力してくれるメンバーが出ることを祈ろう』と医学教育支援に対する義務も一切求めていません。

一般社団の全面的なバックアップにより、これまで 30 年間で 700 名以上の医療関係者を海外研修に送り出すことができ、野口アラムナイ（野口フェロー同窓会）間の交流も年々活発化し、そのひとつの成果として 2012 年東京ベイ・浦安市川医療センター（野口英世記念・野口国際医療センター）に米国式野口研修プログラムを立ち上げることに成功しました。野口フェローが積極的に参画し創りあげた実質上初めての病院であり、その立ち上げには大変苦労しましたが、現場指導医達の努力により 2 年目にして全国の後期研修が注目する医療機関のひとつになることができました。今後も東京ベイにおける経験をもとに、最高の臨床医学教育を提供し、野口アラムナイ帰国希望者の受け皿となり得る医療機関の設立を目指しています。

創立者浅野氏は厳しい評価をされるので、『まだ日本の医療が変わって来たとは言えない。』と評論されるでしょうが、5 年後には野口医学研究所なくして医学交流は語れない世の中が実現していることが予感されます。



高い志をもって無償で 30 年間我々医療関係者を支援して下さった浅野嘉久名誉理事以下一般社団の方々、いつも本当にありがとうございます。そして野口アラムナイメンバーの方々、この厚い支援に応えるべく、今後とも野口医学研究所の活動への積極的参加宜しくお願い致します。

最後に、この財団の設立理念が未来永劫受け継がれることを願います。



野口医学研究所創立 30 周年を祝して



米国財団法人野口医学研究所 評議員
米国法人蓮見国際研究財団 理事長
蓮見 賢一郎

まずはこの度、野口医学研究所創立 30 周年を迎えられたことへ、心よりお祝い申し上げます。私と野口との出会いはこの米国財団法人の創立者でもある浅野嘉久現名誉理事との出会いでもありました。初めてお会いしてからすでに 15 年以上が過ぎましたが、ご紹介の機会をつくって下さったのは、AIG 日本前副社長の故荻原昌二氏でした。

当時の私は米国におけるがん免疫療法に関する研究の場がなく、さまざまな可能性を模索している状況でもありました。そんな折、浅野氏は以前から親交が深く、Thomas Jefferson 大学の副学長であった Joseph S. Gonnella 先生に相談され、同大学の客員教授に推薦頂くと同時に佐藤隆美先生をご紹介下さり、Oncology Division 内に将来の正教授席に根ざした助教教授席を設けるに至りました。2013 年春、晴れて“Hasumi Professorship of Medical Oncology”として大学内部にも公表される運びとなり、記念として同名を配した椅子を佐藤先生と共に頂く名誉を授かりました。

現在は町先生が理事長となられ、すべてが順調に進んでいますが、これまでに至る経緯から多くの苦難があったと推測しております。特に浅野氏は「日米医学交流」という、この法人設立当初の理念を貫き、また他への妥協を許さずに公私共にその発展に寄与されてきました。私自身、法人経営の責任を担っている者の立場からしますと、そのご苦労は察するに余りあったように思います。

浅野氏から教えて頂いた人生の教訓は、初心を貫きそれを曲げない信念を持ち続けること、そして人は将来そうありたいと望んでひたむきに努力を惜しまねば、必ず報われる時が来るということです。

創立 30 周年を迎えるに当たり、私自身ももっと野口の活動に参加できれば良かったのですが、がん免疫療法に関する自分自身の中でのやるべきことが山積しており、ほとんどが浅野氏を中心とした親交に終始してしまったことを申し訳なく感じております。

すでに約 1,000 人を超える数多くの留学生がこの野口医学研究所を通じて巣立っていかれたと思います。浅野氏とその思想を共有されてこられた数多くの諸先生方、さらに J. Michael Kenney 氏、澤田崇志氏、鈴木真奈さんなど事務局の方々に心より敬意を表したいと存じます。教育は人間同士の心の絆を支える最も有効な手段でもあります。これから更に日本と米国の医学交流の場を広げ、世界に貢献できる財団として活躍されることを願ってやみません。



Greetings & Congratulations



米国財団法人野口医学研究所 副筆頭理事
J. Michael Kenney

On the occasion of its 30th Anniversary, it is my pleasure to warmly congratulate the leaders, professional staff, and alumni of the Noguchi Medical Research (“NMRI”) and all of their international partner institutions for their numerous achievements and substantial contributions to international medical education exchange over the last thirty (30) years.

The efforts of NMRI and its partners have had a significant impact on enhancing the dialogue on medical education between medical leaders in both Japan and the United States along with providing educational and training opportunities in international clinical settings for numerous medical students, extern and observer doctors, dentists, nurses and OT/PT students.

The central reason that NMRI and its partners have been able to make consistent and meaningful contributions to Japanese society over the last thirty (30) years is that the foundation has been most fortunate to have the vision, leadership, and energy of Drs. Akitsugu Ojima, Joseph S. Gonnella and Yoshihisa Asano.

Since its inception, Dr. Asano has also been the source of the major financial resources for NMRI. These contributions have enabled the organization to plan, develop, implement, maintain and improve its

programs and activities in Japan and the United States and maintain its Tokyo office and professional staff. Without such contributions, NMRI would not have been able to carry out its mission.

NMRI owes an extraordinary debt of gratitude to Drs. Ojima, Gonnella and Asano for their contributions over the last thirty (30) years.

In addition to strong leadership and financial stability, other key factors for NMRI's long run success have been its commitment to collaborative efforts and on-going communications with its partner institutions abroad led by Drs. Ojima, Gonnella and Asano.

Effective collaboration and clear communications have been essential in building and refining the foundation's successful international medical education exchange programs.

Such strengths have taken decades to patiently develop and nurture among senior leadership at partner institutions and at NMRI. And on-going collaboration and communication will be most important factors for future program development.



Fundamental and rapid changes in current and future clinical care are being driven by Nanomedicine.

Continued success in Nanomedicine will be based on collaboration between and communications among interdisciplinary teams of researchers, engineers and clinicians involving partnerships between health care institutions and corporations.

The need for effective collaboration and communication among professionals and institutions will only increase as innovation provides greater opportunities in personalized medicine and personalized diagnostics.

In turn, innovations in science, engineering and clinical care will no doubt call for innovation in medical school curricula and graduate medical education to help clinicians take advantage of new tools and techniques to diagnose and treat patients.

NMRI will be well-positioned to fine-tune its programs and activities to encompass such future innovations in medical training and education based both on its existing relationships with leaders in medical education and graduate medical training and the foundation's history of international collaboration and communication.

As NMRI moves forward in this fast-paced, global healthcare environment, we can expect that the foundation will continue to make significant contributions to society.

For thirty (30) years, the leadership of NMRI has understood the importance of maintaining a clear focus on mission and programs. This will be most important in the future.

NMRI remains firmly committed to staying sharply focused on its central mission of improving the quality of patient care through enhancing medical education.

In closing, I would like to again share my warm congratulations to NMRI on this important anniversary. I wish NMRI continued success in the future.



Congratulations on the 30th Anniversary of the Noguchi Medical Research Institute



ハワイ大学医学部 Dean and Professor of Medicine
Jerris R. Hedges



ハワイ大学医学部 Vice Dean
Satoru Izutsu

On behalf of the University of Hawai'i, John A. Burns School of Medicine (JABSOM), we extend our heartiest congratulations on the 30th anniversary of the Noguchi Medical Research Institute (NMRI).

Thirty years ago, Dr. Yoshihisa Asano, Founder and Chairman Emeritus of NMRI first introduced the NMRI to Hawaii. His goal was to seek programs in Hawaii that would promote continuing medical education for young Japanese physicians. Dr. Asano's aim was to have some of these physicians continue their education in the U.S. as medical residents to foster an international medical education exchange. Thus the plan included directing these physicians to return to Japan so that they might have a positive influence on the total well-being of the Japanese people. Dr. Asano projected that a few of these physicians would remain in the U.S. to provide medical care to the thousands of non-English speaking Japanese who were migrating to the United States under the auspices of large Japanese businesses.

Today, the Noguchi Medical Research Institute through Dr. Asano continues to support annually 10 or more young physicians to attend the University of Hawaii for short periods. In addition, more than 10 senior University of Hawai'i medical students with the support from the Noguchi Medical Research Institute travel to Japan for reciprocal exchanges to learn about medical care and become acquainted with the Japanese language and culture. The ultimate objective of the program is to have future Japanese and American physicians experience the delivery of health care in their respective host countries and to develop a sense of serving in a global community. In addition, for some of the Japanese physicians, these exchanges provide the opportunity for a postgraduate medical training in the United States. Many of these physicians have returned to Japan with the motivation to contribute to the total improvement of health of the Japanese people.

We applaud Noguchi Medical Research Institute under the leadership of Dr. Yoshihisa Asano, Dr. Junji



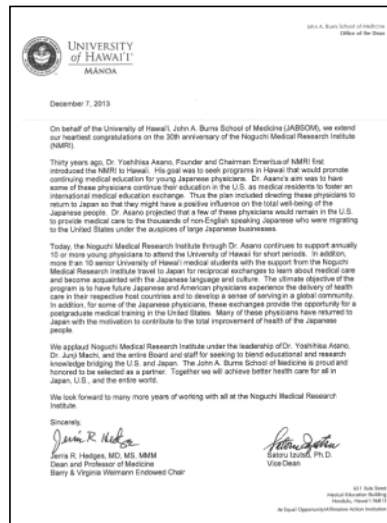
Machi, and the entire Board and staff for seeking to blend educational and research knowledge bridging the U.S. and Japan. The John A. Burns School of Medicine is proud and honored to be selected as a partner. Together we will achieve better health care for all in Japan, U.S., and the entire world.

We look forward to many more years of working with all at the Noguchi Medical Research Institute.

Sincerely,

Jerris R. Hedges, MD, MS, MMM
Dean and Professor of Medicine
Barry & Virginia Weimann Endowed Chair

Satoru Izutsu, Ph.D.
Vice Dean



Noguchi Medical Research Institute 30th Anniversary Remarks



トーマスジェファーソン大学 副学部長 小児科教授
Charles A. Pohl

Relationships are at the core of medicine. During the basic science courses, a medical student explores in depth the relationships between organs, blood vessels, nerves and muscles as well as physiologic interactions. By learning these associations, a physician will know how to avoid injuring a fetus' scalp during a Caesarean section, puncturing a lung during a procedure or missing the diagnosis of Anterior Cruciate Ligament (ACL) tear. In the clinical setting, the healthcare team must work together and perform in unison like an accomplished orchestra to produce harmonious results. And, most importantly, the patient/physician relationship, which includes trust, compassion, empathy and communication skills, is at the core of doctoring and is critical to a patient's healing.

A collegial relation between Jefferson Medical College (JMC) in the Unites States and Japan began in the mid-1800s and has been critical for enhancing medical education and patient care¹. Dr. Samuel D. Gross (JMC) and Drs. Ritsugen Miyazaki, Hakugen Murayama and Domin Kawasaki (Japan) shared clinical expertise, medical instruments and fellowship during a visit in Philadelphia. Dr. John Berry (JMC) reciprocated by visiting the International Hospital in Kobe in the 1870s. This transpacific synergistic relationship crystallized and strengthened over the past 30 years ago when the Noguchi Medical

Research Institute (NMRI), under the leadership of Dr. Yoshihisa Asano, opened its doors in Japan to enrich medical education and clinical care. It has successfully accomplished this mission by partnering with medical institutions and physician leaders in Japan and by collaborating with other esteemed medical teaching centers and world leaders, such as the esteemed Dr. Joseph Gonnella at JMC. These relationship have touched many lives –numerous physicians around the world including myself and those patients for whom they care. I therefore want to personally congratulate and thank NMRI on this wonderful achievement and momentous milestone. I applaud Dr. Asano and the NMRI for their vision, their ability to improve medical education and patient care, their contribution to the healthcare worldwide and the relationships that we have personally shared through the years.

¹Ono Jo. Jefferson's Legacy to Japan. *The Jefferson Medical College Alumni Bulletin*. Volume 31(winter), 1982.



野口医学研究所創立 30 周年を祝して



学校法人香川栄養学園 女子栄養大学 学長
香川 芳子

野口医学研究所 創立 30 周年 おめでとうございます。

昭和 39 年当時、東京大学の栄養学教室にしばらくの間研修に来ておられた学生さんであった浅野嘉久先生が、10 年ほど前、女子栄養大学に突然おいでになり、研究をしたいとお話、そこで本学の桑原祥浩教授をご紹介しました。その後、浅野先生は平成 22 年に目出度く学位をおとりました。

その間に野口医学研究所には本学卒業生を今日まで何人もご採用頂いております。やがて、医学学生の米国留学を支援される活動をされており、その採用試験場として本学の校舎をご使用頂いたりしているうちに、数々の立派な事業をされていることを知りました。最近では本学の教職員に対し米国での研修の機会を頂き、何人かがお世話になっております。

また、本学園には度々のご寄附を賜る一方、学生への奨学金を頂けるようになるなど、本当に感謝しております。

昭和初期、日本特有の疾患で患者、死亡者が多く、亡国病と呼ばれていた脚気の研究で主食の白米食が原因で、胚芽米にすれば予防できることが東京大学の島菌内科で発見されました。そこに本学園創立者の医師夫妻である香川昇三・綾が在籍

していました。島菌教授の示唆で正しい食生活の普及により脚気患者などの食事に起因する病人を減らすことを志して発足したのが本学園です。

本学園には現在、日本で唯一の栄養学部として健康と栄養に関する教育研究を中心としている大学があります。大学では管理栄養士、栄養士、臨床検査技師、養護教諭、家庭科教諭などの資格が取得できるほか、併設の専門学校では調理師などの資格が取得できます。本学園は本年度で創立 80 周年を迎えました。しかしながら、私学なので、どうしても学費の負担が困難だという学生も少なくありません。野口医学研究所からはこうした学生達のための奨学金を賜り、本当に有難く存じております。また、米国の病院での研修をさせて頂いた教員たちは新しい教育力をつけることができ、心からお礼を申し上げます。今後一層のご発展をお祈りいたします。



30周年記念に寄せて



米国財団法人野口医学研究所 評議員会副会長
一般社団法人野口医学研究所 社員・顧問
澤田 崇志

浅野さんと私の出会いは、今から約 40 年前になります。それは正木清彦先生（野口医学研究所監査役）の紹介によって入社した、プリストルマイヤーズ時代に遡ります。浅野さんは既に社長室長・クレイローラ事業部長という要職に就いており、私から見れば、「雲の上の人」であったことを鮮明に記憶しています。正木先生の影響だと思いますが、私はどういう訳かその「雲の上の人」にとても良く面倒を見て頂きました。プリストル社を退社後、ASA という会社を浅野さんと共に設立するまでになりました。結果的には、ASA は浅野さんが退いた後、程無くして倒産の憂き目に会い、私は浅野さんとは暫くの間離れ、全く畑違いの仕事をしておりました。当時のことは、浅野さんがある出版物に掲載を依頼されたエッセイに詳しく書いておられますので、機会があればお目を通し頂ければと思います。

「野口」の歴史とは正に浅野さんそのものだと思います。このことは私ばかりでなく、浅野さんをご存知の方なら、誰もが大きく頷かれることでしょう。今でこそ、「野口」の国際医学交流はシステム化され、そのレールに乗ることが出来た医療従事者は、誰もが米国で学ぶ夢を叶えることが出来ます。しかし、このレールは、「野口」設立の理念に通った医師を一人でも多く育て、世に送り出す為のビジネスを、思案し、計画を立て、実行された浅野さんによって引かれたもので、浅野さん抜きに

して①「海外駐在員と家族の為の人間ドック®設立」②「電話による医療健康相談サービス=ドクターホットライン®」の誕生はあり得ませんでした。浅野さんのこの実行力は、野口英世博士のそれと通ずるものがあると思います。

この 30 年の間に、忘れてはいけない、悲しくそして辛い社会的な大惨事が二つありました。一つは、2001 年 9 月 11 日に米国国内で起きた同時多発テロです。特にその事件の象徴として、世界中の人達の記憶に未だ新しいのは、ワールドトレードセンタービルの崩壊ですが、丁度この時、浅野さんと私はフィラデルフィアに滞在しておりました。

浅野さんは、数多くの健康に係わるビジネスを立ち上げていますが、その中に前述した海外駐在員とその家族の為の人間ドック®を主としたクリニックの経営があります。本部があるフィラデルフィアの他にも、ニュージャージー、ロスアンゼルス、ハワイ、上海、広州、北京、そしてサンパウロにも造りました。私は各地に於ける営業部隊の責任者として、日本企業を訪問してはクリニックでの受診を案内して廻っていたのですが、そんな中であの悲劇は起こったのです。浅野さんと私はテレビ中継であの地獄絵図を見ていましたが、何が起きているのかは、私には全く理解ができませんでした。

あの惨劇で、ワールドトレードセンターだけで



約 6,100 名の方が尊い命を落とされましたが、その内の数名は『野口人間ドック®』の受診者の方でした。ニューヨークでの営業活動の際には、必ず訪問したのがあのビルでしたから、私にとっては一際悲しい思い出となってしまいました。私が常に背広の襟章として星条旗のバッチを付けているのは、亡くなられた方々へのご冥福を祈る気持ちからです。

そしてもう一つは、2011年3月11日の東北地方を中心とした東日本を襲った大震災です。実に、約 21,000 名の方が亡くなり、未だに行方が分からないという未曾有の自然災害となってしまいました。

私は、地震発生時には神田駅のホームで電車を待っていました。流石にこれはいつもの地震とは規模が違うと思い、東京医科歯科大病院や順天堂大病院に避難し、余震が落ち着くのを待ちました。そこから池袋まで歩き、帰宅したのは翌朝の3時です。思い出しただけでも背筋が凍る思いの震災でしたが、この時に『ドクターホットライン®』が被災者のお役に立ったことを覚えています。被災者の方々から、様々な相談がこの『ドクターホットライン®』を通じて寄せられました。特に日本中が精神的に追い込まれていましたから、メンタルヘルスに係る相談が多く、医師や看護師が懸命に、そして勿論冷静に対応していたことを思い出します。

「野口アラムナイ」のメンバーも全力で震災地

支援活動を続けました。全国に散らばる多くの若き「野口」のドクター達が被災地へ駆けつけただけでなく、地震発生から4日後の3月15日には、海外からもドクターが被災地に入りました。多くの「野口」関係者がこの大災害に、命懸けの支援をしてくれたことを、私は誇りに思います。このような人の痛みや苦しみを共有、共感出来る医療従事者を育てて来たのが、浅野さんの30年に亘る歴史なのです。

30年の間には、斯様に様々なことが有りました。一方で、医学交流を支えるビジネス面でも、多くの商品やサービスを開発して来ました。現在は『ドクターホットライン®・お客様健康相談室』といったコンサルテーション事業、『新健康活力製品・キダ・森の洗い粉』等の製造販売事業、『品質推奨・野口ゴールドコレクション』等の認定事業、『OEM事業』等を柱として事業を行い、患者優先の医療を施すドクターを一人でも多く育てるべく、奨学金を捻出しています。

最後になりましたが、浅野さんが支え続けた「野口医学研究所」の理念とその存在を、更に発展させ、継承し続けていくことが、今後も私たちに課せられた使命であることを心に刻むと共に、改めて浅野さんへ感謝の意を表したいと思えます。

野口医学研究所創立 30 周年に寄せて



米国財団法人野口医学研究所 評議員会副会長
医療法人隆徳会 理事長

鶴田 曜三

創立 30 周年おめでとうございます。

ここに至るまで、数々の困難を乗り越えてこられた、創設者の浅野嘉久名誉理事並びに歴代の執行部に敬服する次第です。浅野さんとの出会いは 26 年前に遡ります。私どもの関連会社が特許を持っておりましたバイタルセンサーに関して興味をもたれ、米国でこそ有用であるので一緒に会社を作り、事業化しようということになり Philadelphia に参り、IML という会社を共同出資という形で作ったことからお付き合いが始まりました。この事業はお互いに資金不足のため、事業自体は途中で断念しましたが IML はその後米国における野口医学研究所の収益事業の中心となる会社になって行きました。

私は顧問会議委員から始まり、理事を経て 2002 年には短期間でありましたが理事長にも就き、前浅野理事長へ引き継いで頂きました。

2001 年末に掛けて起こった数々の不幸な、野口医学研究所の存亡が掛かった出来事による危機回避の人事と考えています。その後数年間の経済的危機を皆で協力して乗り越えたからこそ、今の野口医学研究所があるといえます。

2002 年 1 月より私どもの医療法人隆徳会が Englewood Cliffs, NJ. 及び Philadelphia, PA. のクリニックを引き継ぎました。Philadelphia のクリニックは 2003 年には閉めることになりましたが、NJ. のクリニックは Edgewater, NJ. に移転し、Edgewater Family Care Center として 10 年が経過しています。野口人間ドック® & クリニックの伝統はしっかり受け継がれています。

企業 30 年と言われるように、30 年を超えて運営されている企業・団体は民間では少ないと思われれます。

前浅野理事長から現町淳二理事長になり、アラムナイ組織の整備、後期研修事業 (NKP)、本来の米国臨床研修留学生支援事業等益々充実してきています。これからは今後 20 年ないし 30 年先を見据えて新たな気持ちで新たな事業展開を考えて行く必要があると思います。又アジア (東南アジア) に向けての展開も大切になってくると思われれます。

町理事長を中心に新しい執行部に期待し、今後益々の発展をお祈りします。

2013 / 12 / 7

鶴田 曜三



米国財団法人野口医学研究所三十年のあゆみと今後の成長



米国財団法人野口医学研究所 評議員会評議員
トーマスジェファーソン大学 小児科准教授
アルフレッド・デュボン小児病院 循環器専門医
津田 武

1983年にペンシルバニア州フィラデルフィア市に日米の医学交流の推進を目的として創立された米国財団法人「野口医学研究所」（以下、野口とする）の医学交流プログラムは、これまで数多くの医師、医学生、看護師、歯科医師、栄養士ら医療関係者がアメリカで医学・医療を学ぶ機会を提供してきた。この三十年にわたる野口の医学交流活動で特記しなければならないことは、この医学交流資金が全て野口の関連企業の経営努力により可能になったという驚くべき事実である。野口のこれまでの業績は、政府や自治体からの補助金・助成金に一切依存しなかった。このユニークな活動を可能ならしめたのは、創立者浅野嘉久氏を中心とする営業部門の人たちの確固たる目的意識と絶え間ない努力の継続の産物であることは、ここで銘記しておく必要がある。このふれない姿勢が、野口における「自由」なる発想を支えてきた。この「自由」を尊ぶ精神こそが、これまで野口が育ててきた人材とともに現在の野口の最大の財産となっている。

医学交流の意義も、この三十年の間に大きな変革を伴った。日本から一方的に海外から何かを学ぶという時代は終わった。また昨今のインターネットの普及による「情報革命」により、多くの人々が膨大な専門情報・知識を共有できるようになった。しかしながら、その「文化」を作りあげた時代の「精神 Esprit」を学ぶためには、やはりそこに住む人たちと同じ空気を吸い込み、同じ生活を

共有することが必要である。留学を志す各自が何を海外から学ぶのか自分の中で明確に位置づけられていなければ、留学の本当の意味はわからないであろう。但し、自分たちには何かを感じ、それを正しく評価し、その良さを学ぶという基本姿勢は今も昔も変わりはない。我々自身も、今でも医学交流の意義を追究し続けている。野口の医学交流プログラムに参加する人たちに特に学んで欲しいのは表面的な「結果」ではなく、その「結果」を生み出した試行錯誤のプロセスと決断 Decision making の理由付け Reasoning である。同時に、若い人たちは、未知なるものを追究する好奇心、自分と相容れないものを受け入れる寛容性、新しい規範を構成してゆく想像力、そして失敗を恐れぬ勇気を積極的に育てて欲しい。

また近年は、従来の医学交流プログラムに加え日本における新しい医学教育の導入と確立という重要な目標も生まれた。野口がこれまで育ててきた人材を如何に有効に社会にフィードバックするかという課題である。これに関しては、様々な医学教育セミナー活動の推進、また町理事長を中心とした Noguchi Kenshu Program (NKP) という実際の卒後臨床研修プログラムを実践するに至った。野口の新しい局面として、NKP の今後の成長が楽しみである。日本の医学部も以前に比べて閉鎖的でなくなったと言えるが、未だに「経験」が「科学的解決」を優先する価値観からまだ完全に脱し得ていない印象を受ける。この NKP が、



これからの若い人たちが自信と喜びを持って医師として成長を体現させるシステムの具体的な雛形になればよいと考えている。蓋し、今後野口の果たすべき役割は、これまで以上にますます大きなものになってくるだろう。

医師という仕事は、特殊な職業 Profession である。日本で今でも聞かれるが、「医師が偉いのかどうか？」とか「患者様は神様か？」などという議論が一体どれだけ本質的なものであるのかは全く疑問である。しかし、世の中には医師だけにしかできないことが数多くあり、それをどれだけ正しく行えるかどうかにより、その医師が本当の Professional として評価されるのであろう。当たり前のことだが、「医業」というものが尊いものとされるのは、医師が医師としての本来の役割を果たすからである。それが何であるのかを日本の医学部は医学生たちに十分に教えていない。「医業」が、Science と Art の両方により成り立っているという所以である。若い人たちは、それが何であるのかを自分達からその回答を真剣に探す積極的な努力を続けて欲しい。野口の今後の発展は、紛れもなくそのような若い人たちの真摯な姿勢の上に依存していることを我々も決して忘れるべきではない。



NPO 野口医学研究所設立と 野口記念インターナショナル画像診断クリニック設立



米国財団法人野口医学研究所 常務理事
野口記念インターナショナル画像診断クリニック 院長
佐藤 俊彦

米国財団法人野口医学研究所の創立 30 周年にあたり、これまでのご苦労とその業績に敬意を表するとともに、次の 30 年作りのために、NPO 野口医学研究所の設立と同時に、野口記念インターナショナル画像診断クリニックの設立をいたしましたので、その経緯をご報告申し上げます。

NPO 野口医学研究所は、教育活動に専念するために、広く一般の皆様からの賛同とご支援をいただきながら、1,000 名を超えるアラムナイの皆様と共に活動するべく設立された NPO 法人です。設立にあたりましては、副理事長の理念に基づき、財団への財務的支援を受ける体制から、アラムナイの先生方のご協力および JADECOM との連携活動などで得られる収入を教育活動に集中させる体制に変えていこうという意図があります。また、野口記念インターナショナル画像診断クリニックは、アラムナイの先生方の医療の実践の場の一つとして設立されました。今後、法人化後に、NPO 野口医学研究所への寄付行為ができるように鋭意診療活動にあっております。

野口記念インターナショナル画像診断クリニックでは、3 つの診療の柱で運営しております。

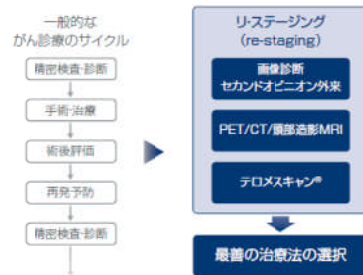
1. セカンドオピニオン外来：re-staging

がんの患者さんを中心に、治療法に対する不安や質問に対して、画像診断の専門家としてアドバイスする外来です。

Re-staging を全身 PET/CT + 造影頭部 MRI で実施します。

早期に再発や遠隔転移を診断することにより、トモセラピーや抗がん剤、免疫療法との組み合わせで、治療をアドバイスしています。

術後の外来では、画像で転移を確認できない場合でも、CTC (Circulating Tumor Cells) が陽性のことがありますので、みえないがんをみつけて、対処することが可能となりました。がんに関する専門家のアラムナイの先生方にお手伝いいただければと思っております。



2. テロメスカンによる見えないがんの診断

CTC の検出は、米国では FDA の許可を得て臨床応用されています。ジョンソン&ジョンソンの Cell Search 法ですが、死細胞も検出するため、必ずしも転移するとは限らないこと、感度が低いことが問題とされていました。

当院では、オンコリスバイオファーマのテロメス

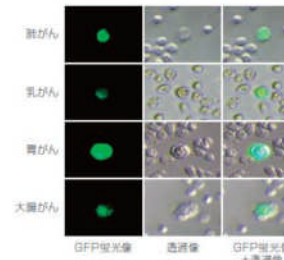
キャンを使い、生きたがん細胞の CTC の検出に成功しています。

これを健常者に画像診断とともに用いることで、画像では発見できない超早期のがんを発見できる状況になっています。

また、がん術後の経過観察では、やはり同様に画像診断とテロメスカンを組み合わせることで、超早期の転移再発のチェックが可能となっております。

新しい予防医療のご提案と、新しいがんのフォローアップ外来を実践しています。

テロメスカン®によって蛍光検出された
がん患者末梢血中のCTC



3. DC-BAK 療法

従来のがん治療は、標準的治療として、手術・放射線治療・化学療法を実施していましたが、無効例に対して、第 4 の治療である免疫細胞療法を実施しておりました。

したがって、かなり手遅れの状態の患者さんに使うために、効果を確かできないままお亡くなりになるケースが多かったのですが、当院では、術後の患者さんで画像では再発・転移が確認できないが、CTC 陽性の患者さんに積極的に免疫細胞療法を実施して効果を上げております。

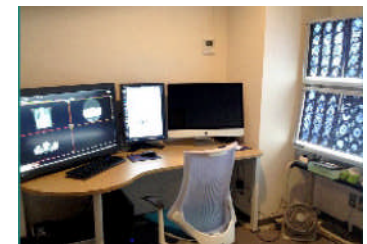
さらに、樹状細胞療法は、 $\alpha\beta$ -T 細胞を使いますが、BAK 療法では $\gamma\delta$ -T 細胞を組み合わせることにより、効果を上げています。

これまでの免疫治療は、ひとつの理論に基づいて

治療されることが多かったのですが、免疫系を複数のシステムで賦活する方法、抑制系の T 細胞を抑制する方法など、手術で取り切れた患者さんにごそ有効であると考えております。



ぜひ、皆様のご協力のもと、NPO 野口医学研究所および野口記念インターナショナル画像診断クリニックの運営を成功させ、医学交流や教育活動のお手伝いできればと考えております。今後とも、よろしくお願いいたします。



野口記念インターナショナル画像診断クリニック
Noguchi International Diagnostic Clinic

野口医学研究所 30周年記念に寄せて



米国財団法人野口医学研究所 常務理事
徳洲会地域家庭医療総合センター センター長
佐野 潔

私と野口との関係は、さかのぼる事 1991年に始まりました。それまで個人的に行っていた日本人医学生のアメリカでの開業家庭医療見学実習を、正式な野口のプロダムとして行うための日本側での人選などの事務の委託をしたところからのおつきあいです。まだ津田先生や佐藤（隆）先生が渡米して間もない頃でした。

数年後 1994年にニュージャージー野口人間ドック・クリニック開院時の副所長として関わり、それから2年半に渡りミネソタ州での開業を続けつつ、ミネアポリス空港からニュージャージー州ニューアーク空港までを毎週火曜夜と金曜夜にノースウェスト機で往復して診療所の経営援助をした事は今でも覚えています。その頃私はミネソタの農村でグループ開業をしており、忙しくてミネソタを離れるわけにはいきませんでした。米国財団野口医学研究所もフィラデルフィアに開所してまだ間もなく、人間ドックと日本人診療をしていましたが、ニューヨーク進出という事で是非とも力を貸して欲しいという事で、浅野氏の要請を受ける事にしました。まだ日本でのアラムナイ組織も青木先生を世話役に結成しようという事だけで会合をするほどの人員もいなかったばかりでなく、ハワイ大学との協力関係もまだなく、ジェファーソン大学との関係が始まりだした頃の事です。

そして、あれから20数年、アラムナイの数が増えるに従い、日本における教育活動も、驚くほど拡大し、JADECOMと協力して独自の研修病院

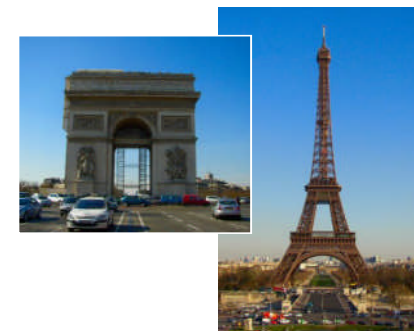
を持つようになった今では、野口の意図であった日本の医学教育の変革に大きな足跡を残していると思います。当時、津田先生が日本の医学教育維新を自分が坂本龍馬となって起こそうと熱気にあふれていたことを思い出します。

現在、トーマスジェファーソン大学、ハワイ大学など強力なバックアップを受けつつ、野口がお世話をした立派なアラムナイらが野口の教育活動を支えております。これからは、アラムナイにとってこういった野口が皆さんにしてくれた事へのお返しをする番です。

野口の活動の本当のゴールは漠然と“立派な医師”を育てる事、日本の医学教育の変革にあるわけではありません。それは、日本の国民が、いや世界の人々がいい医療を受けられ、幸せな人生を送る手助けをする為にあると思います。アラムナイらがブランド病院や大病院、大学病院で影響力をつけていく事は決して悪い事ではありません。しかし、野口の望んでいるものはそれよりももっと先にあるのです。病む患者さんの役に立つ医師となる事、患者さんの気持ちが理解できる Empathic な医師を養成して、社会に貢献する事にあります。決して研究の為だけでも、教育する為だけにあるのではありません。将来の野口の方向性としては、日本における医療の底上げ、質の向上に貢献すること、地域離島などの医療の援助など、アラムナイが結集して臨床活動をして行くことが教育活動に加えて必要になってくると思います。



私自身、米仏での27年間の臨床経験を経て日本に戻ってきましたが、私の今のミッションは家庭医療を日本全国に普及する事で、都会から地域、僻地離島の患者さんまで全ての人々がレベルの高い医療を受けられるようにすることです。まずは自分がやって見せる事をモットーに、現在は家庭医療診療、在宅医療、離島医療、在日外国人医療、海外途上国医療を少しずつですが行っています。これからも、これらの仕事を通して地域医療の発展、優秀な家庭医の養成を、今後野口と共に頑張っていきたいと思っています。野口の活動も、中央から地方へと拡大し、地域の第一線で医療を直接行うリーダー的医師を増やして行く必要があります。都会の大病院の専門医を養成する事も必要かもしれませんが、野口アラムナイはもっと使命感を持って、病院を出て医療の第一線の現場に目を向ける必要があると思います。野口のアラムナイは大病院、有名病院のエリート医師になってはいけません。



今、野口はジェネラリストの養成に力を注ごうと考えています。それも、TVショーのDr. Gのような病院の内科診断屋ではなく、究極のジェネラリストとしての全科診療の行える、患者の心と背景が判る家庭医を育てたいと考えています。そして近いうちに、野口アラムナイ医師が短期間でも離島などで診療ができるようなシステムを構築して行きたいと考えます。アラムナイの皆様は、日本全体（本当は世界）をフィールドにして医療を展開するようなスケールの大きな医師に育てていただきたいと考えます。

今後もさらに野口は発展・変貌して行くと思いますが、いつも患者さん中心の医療に寄与する活動をして行く事を忘れないでいただきたいと希望します。そのための若手医師研修・教育であり、そのための海外留学であったはずで、更なる野口アラムナイの発展を祈ります。



野口医学研究所創立 30 周年に寄せて



米国財団法人野口医学研究所 常務理事
日本歯科大学 生命歯学部 部長
羽村 章

野口医学研究所創立 30 周年、おめでとうございます。心よりお喜び申し上げます。

野口医学研究所が誕生した 30 年前、私は大学院研究科過程を修了し、自分の行く道を探している時でした。大学院では歯科治療に使用する材料の研究を行っていました。口の中の型を取るための材料（印象材：impression material）の寸法精度研究で、毎日歯科材料と測定機器を扱っていて、歯科医師というよりも理工学研究者と言った方が良い 4 年間でした。臨床歯科医を目指していた私は、博士課程修了を契機に臨床現場に戻る努力をしていましたが、その時に初めての海外学会参加の機会も得ました。アメリカのボストンでした。この時から海外で仕事をしたいという気持ちが、少しずつ大きくなっていきました。

所属を高齢者歯科診療科に変更し、講師となりました。しばらくしてから大学からの海外派遣者にも選ばれ、1990 年 3 月に Finland Turku 大学医学部歯学科う蝕学教室に留学する機会を得ました。高齢者特有のむし歯の研究と臨床を行い、1991 年 10 月帰国するまでのわずか 1 年 7 か月の滞在でした。お年寄りが相手の臨床と研究でしたので、フィンランド語を覚える良い機会ではありましたが、帰国後はいくつかの関連病院での勤務をしていましたが、その病院の事務長から創立者・名誉理事の浅野さんと評議員会副会長の澤田さんを紹介されました。野口医学研究所がまだ 10 歳くらいの時です。

野口医学研究所の経済的そして事務的な力を

借りて、1999 年に 2 回米国に短期研修に行きました。初めは Penn 大に単身で、次に行った Maryland 大は乳飲み子の長女を含む家族連れでした。研修は有意義で、自分の知識も技術も向上したと思いますが、それ以上に、米国の社会環境や生活をマイクさんたちから教えて頂いたことは、大きな収穫でした。

2001 年、私の勤めていた大学附属病院では、講座・医局制を解消し、講座から診療科を独立させました。多くの同僚の先生方は戸惑っていましたが、私は比較的落ち着いて、この変化に素早く順応できました。おそらく、短い期間でしたが、米国で研修したことが、この変化を容易に受け入れられたのだと思います。高齢者歯科診療科から総合診療科に配置換えとなり、診療科長、教授を経て、2008 年から 5 年間、附属病院院長を務め、2013 年から高齢者歯科学講座に移動し歯学部部長になりました。野口医学研究所を介して多くの人達に出会わなければ、浅野さんをはじめとする野口の多くの方々から影響を受けなければ、何度かの部署替えと環境の変化に対応できなかったらうと思っています。本当に感謝しています。

野口医学研究所が歩んだ 30 年と自分が臨床歯科医として歩んできた道を重ね合わせました。今関わっている人たちも、何時かは引退する時が来ます。しかし、野口医学研究所は良い臨床医のために、そして米国と日本の医療の架け橋として、これから先も永久に歩み続けて行く事でしょう。益々のご発展をお祈り申し上げます。

15 年を越える野口医学研究所による支援と東京大学の Kimitaka Kaga Visiting Professorship in Medical Education について



米国財団法人野口医学研究所 常務理事
東京医療センター 感覚器センター 名誉センター長
加我 君孝

野口医学研究所創立 30 周年おめでとうございます。私にとって野口医学研究所は、医学生には米国留学への夢を与える大きな事業に加え、東京大学の医学教育を 15 年にわたって陰で支えていただいている私の恩人です。私は 20 年以上前にジェファーソン医科大学のゴネラ教授のところに留学しました。ゴネラ教授が野口医学研究所の理事になって私も誘われたことが始まりです。

私は東京大学では、医学部の耳鼻咽喉科学教室で約 16 年弱教授として仕事をすると同時に全学の 20 のセンターの中で 15 年前に文部省の援助で出来た最も新しいセンターである東京大学医学教育国際協力研究センターのセンター長として活動をしました。このセンターでは毎年海外の医学教育の専門家を公費で 1 名招聘するプログラムがあるのがありがたく、海外の先生から多くを学ぶことが出来ました。このプログラムは往復の旅費、給与、宿舎を公費で負担することができます。問題点が一つあります。いかにして毎年コンスタントに世界中から選抜して招くかということです。選ばれる方も海外の有力大学で現役で活躍しているところを 3 ヶ月～半年休職して日本に来ることが出来るか悩むことになります。どのように募集するかも問題です。最初は、第 1 回招聘者のハーバード大学医学部の Inui 教授が米国の医学雑誌に募集広告を出して、かつ選抜していただきました。その費用には 5,000 ドルがかかるため、その財源が問題でした。このような活動費は大学の予算に計上できないからです。私的に援助してく

れる財団、あるいは会社がないか考え、野口医学研究所の浅野嘉久現名誉理事に相談したところ、以前に黒川清教授がおられた頃、東大医学部・ハーバード交流プログラムを援助していたので、その延長として継続していただけることになりました。野口医学研究所の財政を考えると厳しい財務内容の中から特別な配慮で私が東大医学部を去った 6 年前から現在に至るまでも援助していただいています。Inui 教授は私の退官と同時に、募集担当の仕事はカナダのマギル大学の Linda Snell 教授に継承していただくことになりました。この募集と招聘を合わせて、センター長であった私の名を冠して“Kimitaka Kaga Visiting Professorship in Medical Education”として継続していることは私にとって嬉しいことです。2013-2014 Kimitaka Kaga Visiting Professor in Medical Education はカナダのマギル大学から Joyce Pickering MD, FRCPC, FACP が、2013 年 10 月 16 日から半年来られることになりました。私にとって私の名を冠したプログラムで来日される先生方にお会いすることはとても嬉しいことです。このプログラムのお蔭で海外の医学教育の変化を直に知ることが東京大学の医学教育の改革とつながっています。野口医学研究所の陰の支援はよく認知されていないかもしれませんが、私にとってどれだけ有難いものであるかいくら感謝しても言葉では言い尽くせません。

野口医学研究所 30年、アラムナイの強い絆



米国財団法人野口医学研究所 筆頭理事・倫理審査委員会委員長
千葉大学名誉教授 元薬学部長

渡辺 和夫

野口創立 30 周年、心からお祝い申し上げます。私が野口に関わるようになったのは、大学、職場での先輩、千葉大学名誉教授の廣瀬聖雄先生のご紹介であった。先生から、研究所で漢方と薬理学の知識が必要なが多いので手伝ってくれというお申し出であった。以後、かれこれ 15 年以上のお付き合いになった。勿論、野口の設立の理念、理想に共感してのお付き合いであるが、それにも増して、研究所に集う人々の、損得を離れた、医学振興に対する考え方の純粋さに対する敬意が私のモチベーションになってきた。毎年実施される野口国際交流セミナーでは、米国で臨床研修を希望する若い臨床医の熱気で溢れかえる。日本では学べない患者中心の厳しい臨床研修への若い医師の純粋な願望は想像以上のものである。講師には、多くの米国人現役教授が参加されるが、そのほかに野口のサポートにより外国で研修を終え、パーマナントポストを獲得した米国大学の教授、助教授、そして現に研修中の先輩医師並びに日本でしかるべき活躍をしているアラムナイメンバーがあたる。従って、ガイダンスは実体験に基づく、親身で具体性富むものとなっている。そして、そこには、他で見られない連帯感が自ずと形成されてくる。

野口の多彩な活動と成果については他の執筆者が述べられると思うので重複を避けたい。ただ、昨年、東大の鉄門講堂で開催された国際交流セミナーのシンポジウムに触れておきたい。ここでは、

生命科学の旗手、福岡伸一先生を中心に「いのちと動的平衡」なる題の下にパネルディスカッションが行われた。この討論に先立って、参加者には、座長の町淳二理事長（ハワイ大学外科学教授）から二つの宿題が出されていた。第一問は、「僻地医療に献身したい若い医師が寒村に診療所を開設し、素晴らしい実績を挙げた。ところがその後、患者が殺到し、診療の処理能力をはるかに超えてしまった。」このような局面で君だったら採るべき対処法如何。第二問は「難病の免疫治療法が開発された。医療費は1億円かかる。担当患者はこの経済負担には耐えられない」この場合、君ならどうするかであった。この宿題を巡って、フロアからは次々に手が上がり、流暢な英語の討論が、実に活発に展開された。私はここに、日本の医療に明るい未来をみた思いがした。

最後に明記しておきたいのは、このようなアラムナイの絆に基づく純粋な奉仕活動を支えるのは、研究所の大黒柱の、吼える創立者浅野嘉久博士と、これを支える事務局の重鎮、冷静で忍耐の人澤田崇志さん、それに骨身を惜しまないスタッフの面々の求心力あればこそ野口である。これらの人々に、これからもエールを送り続けたいと思っている。

野口医学研究所創立 30周年に寄せて



米国財団法人野口医学研究所 監査役・倫理審査委員会副委員長
正木 清彦

野口医学研究所創立 30 周年おめでとうございます。

創立 20 周年記念誌に寄稿したのは 3, 4 年前の様子がするのに、もう 10 年経つのかと時の早さに驚かされます。30 年前に初期の野口のシステムで留学された 20~30 歳代の新進気鋭の先生方も今は遺暦前後となられ、その二世が野口から留学される時代になっています。子が親と同じ道を歩むのはその道が魅力にあふれている証拠であり素晴らしいことです。20 周年の時点で医師の留学は 300 名以上を数えていたと記憶していますが 30 周年より前の時点で 1,000 名を越え、近年も着実に実績が残っています。

第二・第三の“野口英世”を生み出し日本の医学の発展に寄与しようという創立者の熱い意志と情熱によりスタートして 10 年たったころ、私が在籍する病院の運営改善に野口のスタッフ、ドクター方が力を貸して下さいいただいたことがありました。当時の悲喜交々を今懐かしく思い出しています。そのご恩返しもせずお役にたつことも出来ず外野席から野口の皆さんの活動を見ているような状態を申し訳なく思っております。

私と野口医学研究所のお付き合いは平成 6 年に始まり今年で 19 年になりますが野口医学研究所創立者の浅野嘉久博士との出会いは 47 年前のことで社会に出て最初に勤務した製薬会社の製薬工場の現場でした。私が 2 年ほど後の入社で後輩です。若き日の浅野青年は様々な点で同年代の

中で抜きんでていました。向学心（好奇心）と向上心が強力で、あらゆる事象の真髄を即座に把握し消化吸収する特殊能力が備わっていました。原理をしっかりと把握している所に独創的なアイデアが加わり複数の技術を組み合わせる画期的な応用技術を次々と考案していたのは入社 1 年目の新入社員の時からでした。私が最初に配属された現場には錠剤にフィルムコーティングを施す装置がありました。それは排気装置を動かしながらスプレー、ポーズ、送風を順に繰り返す作業をタイマーで自動化して行うので品質が安定する上、一人で何台もの装置を扱えるすぐれものでした。さらにそこで使う有機溶剤は爆発の危険が全くないように工夫した安全処方画期的なものでした。コーティングパンの隣には大きな頑丈な真空凍結乾燥機が数台設置されていて、コーティングした錠剤に残存する溶剤をこれで除去し乾燥させるのですが、それもこれもみな浅野さんのアイデアによる手作りだったのです。まだ難に過ぎない新入社員がどうしてこんな発明を容易くやってしまうのだろうかと感じたものです。因みに設立の初期から浅野さんを助けて野口を支えてきた一人で現評議員会副会長の澤田崇志氏は同じ会社で私の 3 年後輩になります。野口のルーツの一端がここに在ります。

その後浅野さんはさらなる向上の展開を求めて広いビジネスの世界に転出して行きました。新しく勉強したことの話時々聞かせてもらい、初めて聞く Operations Research や Return on



Investment などのキーワードがとても耳に新鮮でした。

いくつかの企業の要職をつとめ起業も経験した後野口創立に至った浅野さんには、今に至るまで一貫している生活と仕事に対する理念、信条、モットーがあるように感じられます。いくつもの語が浮かんできますが最初に挙げられるのは、正直、誠実、公正などです。それは浅野さんが若い時から組織人が外部業者と癒着するなど私利私欲がからむ行為を忌み嫌っていたことに現れていますし、外資系企業の勤務経験がそれを強めているように思います。だからこそ内からも外からも信頼される野口として 30 年発展し続けられていることに繋がっているのだと思います。私自身も honest で fair に自分のためだけでなく周りのみんなの為に行動することを心がけ祖国のために幾許かでも尽くして逝けることを願っています。

野口はこれからも米国中心に次々と意欲的な医療者を送り出し続けていくわけですが、最近その方たちをお願いしたいと思うことがあります。日本人が古来伝承してきている固有の哲学、文化をあちらの人たちに伝えてその素晴らしさを知らせてほしいということです。欧米人と交流が多い人の話を聞いたことがあります。日本は万世一系の天皇家が 2,700 年も続いていること、仁徳天皇の民の寵の逸話に象徴されるように日本は古来オリジナルの民主主義国家であることなどを話すとても興味を持って目を輝かせ感心される反応があり、尊敬の念を持たれるのだそうです。

敗戦後日本は歴史のすべてを否定され貶められすぎてきました。1 万年を越える縄文時代の遺跡からは戦いに使う武具が一つも発見されていないという日本以外のどこにも見られない稀有な事実があることを最近教わりました。これが物語るのは、日本では聖徳太子のことばで有名な「和」の精神が根底に定着しており、問題決着の手段としての戦いを必要としなかったことを示しています。この和の精神、オリジナルの民主主義こそが古代から国風文化など各時代の文化を興隆させ、絢爛たる江戸時代の文化の華を開かせたものになっています。最近時間を作っては国史家の話を聞きに行っています。とんどん日本が好きになってきました。東北震災でのみんなが助け合う姿を見るにつけて、そしてそれが海外で高く評価されるのを知るにつけて、本来の日本人が持つ精神性が世界に広まることが世界平和につながるのだと確信ができます。人の心を癒せるのが医療者です。どうか医学の研鑽と同時にもう一度祖国について見つめてほしいと願っています。20 年記念誌と同じ言葉で結ばせてもらいます。人の健康こそは国の繁栄のカギを握る最大の要素の一つですが、それは一国の問題にとどまらず、人類全体の繁栄に関わる根幹の要素です。野口医学研究所の事業が今後も益々発展し、世界の医学・医療の正しい発展に寄与される事を祈ってやみません。

A Noguchi Legacy Mentorships



ハワイ大学 Associate Professor
Doric Little

Mentorless

Academically, I had satisfied my goals by 1987. I had received my doctorate, was a full professor at a community college and was very pleased with my students. I now had the time to reflect on the fact that I did not have a mentor. Since the ninth grade, I had single handedly pursued my goal of becoming a good speech teacher. To discover what I had been missing, I decided to check the definition of mentor in the Wikipedia. I found the following quotation, which largely echoes my views. I would only emphasize that the mentor does far more than give advice. In fact, there is often a very positive camaraderie between the two, which can last a lifetime. In my own case, "Better late than never."

Definition

Mentorship is a personal developmental relationship in which a more experienced or more knowledgeable person helps to guide a less experienced or less knowledgeable person. However, true mentoring is more than just answering occasional questions or providing ad hoc help. It is about an ongoing relationship of learning, dialogue and challenge.

Advisor/Mentors

I believe a good mentor offers the direction, protection and advice that facilitate the academic journey. Upon reflection, I realized that I did have the

good fortune of sharing an office with an advisor/mentor for 30 years at Honolulu Community College. Terrence Haney was a philosopher who encouraged me to think about what I wanted to study, where my career path would take me and to weigh my thoughts carefully. I was blessed to have had the support of this intelligent man.

For three years in the mid-1980's, I worked for the University of Hawaii's Vice President of Administration, Harold Masumoto, as the Employee Relations Administrator. Harold qualifies as an advisor/mentor because of the confidence he had in me. I learned a multitude of facts and techniques about the administration of a system-wide group of campuses. It was also during the 1980's that I was asked by the president of the University of Hawaii to work with his assistant, Dr. Satoru Izutsu, in the hiring process of a new chancellor of community colleges.

MENTORS

Thus began a more than 20-year relationship that ultimately turned my academic interest from law to medicine. Dr. Izutsu was responsible for my move to the medical school and changed the direction of my academic pursuits. He was clearly my real mentor. I had not taken sufficient advantage of any advisor before him. His wisdom taught me the importance of a mentor. Dr. Izutsu, now the Vice Dean of JABSOM

(John A. Burns School of Medicine) continues to support my activities and provide answers to my questions. I am blessed and grateful for our ongoing relationship.

During my second year at the medical school, Dr. Izutsu introduced me to my second important Mentor, Dr. Takami Sato who represented the Noguchi Medical Research Institute. Although Dr. Sato works in Pittsburgh, Pennsylvania, his influence on me was powerful. He was always positive about my work and I left him after each visit feeling confident in my abilities and talent.

I acquired another Mentor when I met with the President of Osaka Gakuin University, Dr. Yoshiyasu Shirai. With his support and guidance, I taught communication skills for five years at OGU via the internet. It was a crash course in working with Japanese college students and with the internet. During this period, I decided to become more knowledgeable about Medical Presentations. My weekly meetings (Thursdays from 5:00 till 7:30) with JABSOM students, Residents, International students and physicians resulted in my commitment to Medical Academia. My happiness with teaching was at its height when I was working with professionals in Medicine, mostly from Japan.

Perhaps the individual who has had the greatest impact on my career both in terms of content and direction is Dr. Junji Machi. Prior to meeting with him, I had authored numerous articles but had no thought of writing a book. In 2011, when Dr. Machi met with me to talk about publishing articles, he saw what I had written and he decided a book would be more appropriate. He told me he would be happy to find the publisher and correct the translation of the text. The translation of the text was a challenge. I do not read Japanese but Yodosha Publishing Company wanted it in Japanese. Dr. Machi came up with the answer. The book was divided into 10 sections. I

recommended outstanding former students to Dr. Machi. He assigned one per section and oversaw the ten translations. It was a great amount of work and, although I cannot read it, those who can are highly complimentary. My only assignment was to caution each translator of the importance of maintaining my sense of humor.

NOGUCHI PRODUCES MENTORS

In this essay, I have discussed my experiences with mentors varying from none to outstanding. One very interesting and perhaps not so surprising finding indicates the changing times. I began my graduate study in 1961 and throughout my career I acquired six mentors – five are of Japanese heritage, one was Caucasian and all are male. The Noguchi Institute is changing the picture. I can assert the capabilities of the young women and men emerging from Noguchi studies. The efforts of Noguchi have greatly improved the ethnic and gender opportunities.

I have arrived at some conclusions, which I will share.

- A congenial mentorship is useful at any level of higher education.
- Mentorships are particularly useful in the study of medicine.
- Mentors are invaluable sources of information, guidance, and campus politics.
- Noguchi members serve as mentors to many scholars, researchers and students.
- Noguchi graduates quickly become mentors.
- Noguchi mentors are increasing every year.
- Noguchi members serve as role models.
- Noguchi members strive to uphold ethical standards
- Noguchi graduates are having a very positive impact on Japanese medical education



A Noguchi Legacy

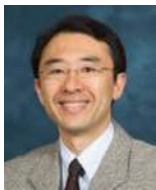
Mentorships

The title of this paper was chosen to encompass my own experiences with mentors, and the role Noguchi members played in my use and appreciation of mentorships. We have been intertwined academically for 20 years. During these years, I have learned the value of the Noguchi members' guidance. I have learned that mentors are important and traditionally male. I have learned Noguchi is already creating a legacy of outstanding mentors with more diversity and more opportunities. I am personally and professionally grateful to the Noguchi Medical Research Institute.

A very special thanks and acknowledgement go to the Founder and Chairman Emeritus of NMRI, Yoshihisa Asano, Ph.D., D.P.H. On a personal note, I am honored to have worked with Dr. Asano and my six mentors. This essay is not a Thank you to family, friends or other supporters. That comes later.



野口医学研究所設立 30 周年記念に寄せて 「異国で頑張るとのこと」



米国財団法人野口医学研究所 理事
ミシガン大学 家庭医療科准教授
神保 真人

私が、野口医学研究所と関わって早 22 年たつ。野口のお陰でトーマス・ジェファーソン大学でエクスターンシップの機会を得ることが出来、現在米国で教育と研究に関わるまでに至った。又、ゴネラ先生の他、既に故人となられたが生涯の師と仰ぐエドワード・マックギー教授と巡り合う事が出来た。

元々帰国子女なので、臨床留学として渡米した時は、他の先生方が体験したような苦労話は余りない。むしろ 8 歳の時初めて渡米した頃の思い出が、時を重ねるにつれ鮮明になってきた。

小学 3 年生の夏、東海岸のニュージャージー州に引っ越した。住む通りは、同年代の子供が多く、英語はさっぱりなもの万国共通のスポーツと遊びで比較的早く溶け込む事が出来た。しかし、9 月となり学校が始まると、そうも行かなくなる。私と弟の通ったカトリック教会の付属学校は、家から少し離れている為、近所の子は 1 人もいなかった。授業は、クラスの隅っこに座り、優秀な同級生の指導の下、絵の付いたアルファベット表を復唱する事から始まった。2 年も経つと、人並みに話せるようになったが、英語の授業となると別問題で、追付くのに苦労した。

最近、病棟チーフとして学生や研修医の指導に忙しい為、もうやらなくなってしまったが、数年前までは当大学の日本家庭健康プログラムを通

じて多くの日本人の診療に当たっていた。殆どは、数年の任期後、帰国する。当然、子供達も同行だ。気になるのは、彼らの表情である。小学生高学年以上ともなると、帰国に対し期待と不安が入り混じった笑顔を見せる。その裏に、子供なりに体験した苦労の影がちらつく。子供といえども新しい環境に馴染むには、個人差がある。良く聞く事には、「現地の学校と日本人学校と好きな方はある？」

「遊べるからアメリカの学校がいい！」と元気に答える子。
「どっちも好き」と落ち着いて話す子。
「日本人学校がいい」とはにかみながら答える子。
「日本人学校のどうい所が良いの？」
「いっぱい喋れるから。」

良く分かる。言いたい事を言えないもどかしさ。口から先に生まれたような連中がうようよしている米国。とにかく意見を言わないと理解していただけないと思われる国だ。「能ある鷹は爪を隠す」なんて美徳は、微塵も無い。

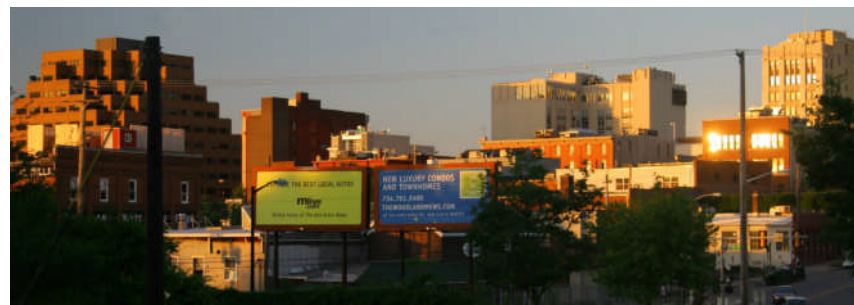
頑張っ現地校に通っていたのに、ある日から行けなくなる子もいる。数年経っても、親友は日本の元級友だと言う子もいる。毎日インスタント・メッセージで連絡を取り合っていると。40 年前は、友達に欲しければ現地で作るしかなかった。開き直す事が必要だった。でもその頃、その様な文明



の利器があったら、自分も使っていたら。狭くなった地球が、逆に海外生活に複雑な影響を及ぼす。

中高校生の頃は、日本人同士群れるのが厭だった。日本人はいつも集団行動をとると言う先入観があり、それに対抗すべく悪戦苦闘していた。でも日本に行けば、米国人は米国人同士、群れている。米国でヒスパニック系の人達が多く住む所では、スペイン語の広告が堂々と街に並んでいる。同じ文化と言葉を共有する者同士、打ち解けるのは当たり前だと素直になれるのに 30 年以上かかってしまった。

話を帰国目前の子供達に戻そう。祖国へ帰る楽しみと、知り合えた友達と別れる悲しみ。勉強や進学への不安。日本に適応していく事への戸惑い。自分の経験からも言えるが、帰国後の逆カルチャー・ショックは、渡米時のカルチャー・ショックを上回る。“Squeaky wheel gets the grease.”と「出る杭は打たれる」の文化の違い。昔の自分を思い出し、今一度「頑張れよ！」と心の中でエールを送っている自分に気付く。



野口医学研究所創立 30 周年



米国財団法人野口医学研究所 理事
国立成育医療研究センター 脳神経外科
師田 信人

野口医学研究所創立 30 周年、おめでとうございます。

1991 年から 95 年まで、New York University Medical Center に留学しました。留学にあたっては、日米医学医療交流財団のフェローに選んでいただき、又在米中は野口医学研究所主催の留学生交流集会などで励まされ、そして帰国後にも何かとお世話になり今に至っています。自分のここまでの人生を振り返れば、国内の大学医局制度を離れ、やりたい分野の目標こそはっきりしていたものの、将来に対する保証も何もない時に受けた思いやりは忘れられないものです。

野口医学研究所は野口英世をある意味、顕彰する形で名前がついています。戦後の復興から発展期に生まれ育った僕らにとって、多少とも医学に興味があれば、医師というより広い意味での医学者としての野口英世の存在は常に意識の中にありました。僕の場合、明治生まれの厳格な祖母より、英世の生い立ちから北米での活躍まで話を繰り返し聞かされていたのでとりわけ強かったかもしれません。そんなこともあってか、英世の逆境にあっての逞しさとか粘り強さは今に至るまで自分にとっての role model であり、留学中から今に至るまで何か壁にぶつかるたびに、英世の写真を見ては「このくらいでへこたれるわけにいかない」と自分を奮い立たせる糧にしています。その英世に由来する野口医学研究所には、名前からして漠然とした身近な感じ？を持っていました。

英世の生家は前任地の新潟にいた時、念願かない初めて訪れました。(在米中に英世のお墓参りをしたいと思っていたのですが時間と資料不足で能わず、この点については今でも悔いが残っています。) 猪苗代湖畔の野口英世記念館の前に、人間、志と努力、そして自分の運をつかむ勇気があれば、それなりのことが出来るんだと改めて感じました。無名時代の英世を支え、又引き立ててくれた周囲の人たちの存在も大きかったと思います。思い返してみれば、野口医学研究所の役割は、英世を支え引き立てていった人と同じものかもしれません。これからも、野口医学研究所の活動を通して、若い世代の人たちが自分の目標を実現するよう努力してもらえればと強く願っています。

帰国して 15 年あまり、たいした貢献もなく過ごしていたのですが、思いがけない展開で野口医学研究所と又関わることになりました。もっとしっかり働け、という意味がこめられているのかと思いますが、これからの野口医学研究所の歴史の中で、自分なりの役割を何か果たせれば、と考えています。野口医学研究所の 30 年にわたる歩みも、決して一筋縄ではなかったと思います。改めて敬意を払うとともにこれからの更なる発展を楽しみにしています。

野口医学研究所 30 周年を記念して、
「黎明期を支えた女性たち」

米国財団法人野口医学研究所 顧問
一般社団法人野口医学研究所 社員・顧問
鈴木 真奈

野口医学研究所創立 30 周年を迎え、改めて野口グループ(以後、「野口」と言う)に関われたことを神に感謝すると共に、今も尚、「野口」の一員であることを大変誇りに思います。

「野口」が今日有るのは、浅野名管理事の優れたリーダーとしての舵取りと、素晴らしい人達との出会いがあったからに他なりません。

これまでの歴史を振り返り、「野口」黎明期を支えた女性たちを紹介したいと思います。

まず、筆頭に挙げたいのは金珠玉先生です。金先生は北京大学医学部出身の医師です。1989 年彼女は結婚したばかりなのに、ご主人が東京大学へ留学した為、東京と北京で離ればなれになっておりました。

今日でも中国人がビザを取得することは楽ではありませんが、25 年前はより厳しい状況で、特に中国は海外への頭脳流出を恐れ、夫婦揃っての留学は極めて困難な時代でした。

しかし、縁あって「野口」が金先生の受け入れ元となり、来日することが出来たのです。来日したばかりの金先生は簡単な日常会話は支障ありませんでしたが、日本語が流暢に話せるとは言い難いものでした。当時、専務理事だった現浅野名管理事の下で不慣れながらも、日本の習慣や言葉を一生懸命学びながら、積極的に来客や電話の対応をしておりました。

浅野名管理事は昔から好き嫌いのハッキリした人でしたが、国や性別で人を差別はせず、先入観で人の能力を枠にはめず、やれば出来る、と何

でも金先生に任せておりました。

金先生が「野口」で勤務する様になってから程無くして、テレビ朝日の徹子の部屋へゲスト出演した浅倉稔生教授(ペンシルバニア大学・CHOP)が「野口」への寄付を募ったところ、翌日から 24 時間、一週間に亘り、事務所の電話は鳴り止みませんでした。日本人でさえ電話の対応は難しく、苦手な人も多く居ます。ましてや渡日間もない金先生にとってはさぞかしストレスだったと思います。しかし、金先生は頑張り抜きました。そして、寄付を申し込んで下さる方々へ精一杯、礼儀正しい対応をし、寄付者のリスト作りから礼状の発送や領収書の発行などをこなしてくれたのです。

それ以外には、浅倉先生から頻りに届くファックス原稿をワープロで清書するのですが、日本人でさえ読み慣れないと判読が難しい、浅倉先生の特異な字体、ミミズの這った様な文字を正確に入力してくれました。

私達は今でこそ必然、PC を使う様になり、便利になっていますが、その当時のワープロはとても不便で使い辛く、皆苦手でした。言い替えば、金先生の存在は「野口」が私達にとって、とても頼りになる頼もしい存在だったのです。勤勉で実直、好感の持てる人柄、とても素敵で、彼女との邂逅は私の人生にとって素晴らしい出来事であったと感謝しています。

その後、金先生は東京大学医学部で医学博士号を修得し、現在は「野口」の参与会参与並びに一



般社団法人「野口」のアドバイザーとして医療ビジネス事業、特に保険調査業務を一手に引き受けるなど、「野口」の奨学金作りに大いに貢献しています。当時の思い出を共有する私としては、「野口」で培ったタイプ「力」が金先生の博士論文作成に拍車を掛け、少なからず役立ったのではないかと秘かに自負しているところです。(笑)

もう一人、忘れてはならないのが岡本秀美さんです。岡本さんは JANAMEF (公益財団法人日米医学医療交流財団) 常務理事高瀬義昌先生の従妹で、やはり縁あって「野口」の一時期を支えてくれました。

帰国子女の彼女は英語が堪能で、明るく愛らしい女性でした。小柄でベビーフェイスの岡本さんには、浅野専務理事に連れられ訪れたアトランティックシティのカジノで未成年者と間違われ、入店を断られてしまい、パスポートを見せてやっと入れて貰えたというエピソードがあります。確かその時の彼女は、既にアラサー (三十路) になっていたと記憶しています。そんなチャーミングな岡本さんですが、彼女はアメリカで展開していた野口人間ドック®の開設⇒営業に係る一連の活動を行う為、単身フィラデルフィアへの長期出張を引き受け、見事に期待に応えてくれたのです。明るくて真面目、物怖じせず積極的な岡本さんの性格を見初め、抜擢したのも浅野専務理事でした。やはり、人の能力や可能性を十分に引き出した良い例だと思えます。

その後、岡本さんは営業先 (寺沢芳男氏、於ワシントン DC) でそのキャラクターが認められてかヘッドハンティングされ、寺沢芳男議員の秘書となりました。残念ながら数年前、不治の病に倒れ、若くして逝ってしまいましたが、私はあの可愛らしい笑顔を未だに忘れることが出来ません。

この他にも、塩野早苗さん、津田和恵さん (現「野口」津田武評議員会副会長の奥様)、山崎尚子さん、名誉会長天野景康先生を深く愛し、支え続けた早川孝子さん…、夫々に関わった時間は短くとも、「野口」黎明期を支えてくれた大切な女性たちでした。

そして、今でも「野口」では素晴らしい The Amazons (アマゾネス軍団) たちが浅野名誉理事の叱咤激励を受けながら、生き生きと活躍しています。

野口医学研究所に幸多かれと祈ります。



浅野さんがゆく



米国財団法人野口医学研究所 参与会名誉会長
有限会社マックスネットワーク 代表取締役
安井 一正

(一)
「安井さん、お客さんがお見えです」、受付の女性がこう私に告げた。
初秋の午後、プラタナスの色ついた風景を窓越しに見ていた私は、「誰だろう?」と入口に視線を移すと、そこには未だ一度も直接お話しをしたことのない野口医学研究所 (「野口」) グループのリーダーである、浅野さんのにこやかな姿があった。12年前の事である。
聞けば、我社の製品が「野口」の「品質推奨証」を得、その知らせをワザワザ一人で車を駆り、知らせに来られたとのことである。

浅野さんは思い立ったら何事につけても直ぐ行動に移すのが身上、この姿勢はその後、何度も拝見している。

(二)
その後、度々技術的な指導をお願いし、浅野さんの幅広い人脈の中のプロフェッショナルを紹介して頂いた。東芝の S 先生、東工大の M 先生、何れも滅多にお目にかかれない各界の権威者である。その都度、必ず浅野さんは同行して下さり、早朝 7 時に待ち合わせ、現地まで浅野さんが一人で運転をされる。夕方になる帰り道、町理事長も大好きで絶賛されている新橋駅近くの「立ち食い寿司屋」で舌鼓を打つ楽しいひと時もあった。

この時に私を感激させたのは、紹介を頂いた先生

方の技術やノウハウに対する姿勢、高見で、今も私の頭に焼き付いている。お蔭で画期的発明の「振動時計 MAXIO」の完成を見ることが出来た。この時計は、2012 年春の「世界時計 20 選」に挙げられ、OMEGA、SEIKO、IWC、CALVIN-KLEIN らと肩を並べたのである。この作品こそが、「野口」プライベートブランド、Noguchi Doctor's Watch へと繋がるのである。

今でも音でなく振動で時間を知らせるこの時計は、Doctor 必携の時計として、数多くの Noguchi Fellow Doctor たちが愛用している。



(三)
K クリニックが患者の「日常の健康管理クラブ」を創って成績を上げていると報告をしたら、「よし、見に行こう」と浅野さん…。



電撃訪問に驚いたのは先方の K 院長である。「医療の内容、診察室の配置等も素晴らしい」との評価を聞いて、K 院長は一安心の様子であった。何事も見た浅野さんの即断、即決。獅子は鼠を獲る時も身体中の筋肉を緊張させ常に全力で獲物を捕らえる、のと同じか。

大いに学んだつもり。

(四)

横浜で大セミナーが開催された。日野原先生 100 才、酒井大阿闍梨（故人）の対談がメインのセミナーで数千人が集まる。浅野さんは冒頭で挨拶。浅野さんは舞台上で登場するだけで、観客の心を掴む、その貫録に圧倒された。

三大巨頭の登壇に観客は、惜しめない拍手、また拍手…。感激と感謝のひと時を過ごさせて頂く。

(五)

私事。息子の嫁が都内の病院で末期ガンと診断され、取りも直さずある早朝、浅野さんに相談する為「野口」の事務所を訪う。早速、未だ出勤時間にはかなりの間があるのに、専門のスタッフへ「すぐ来い、タクシーで飛んで来い」と携帯電話で指示が飛ぶ。

翌日、翌々日と 2 日間に亘り、先端医療で著名なクリニックへご案内頂く。

診断結果はワーストである。治癒の可能性は 10%

以下とのことである。

浅野さんから「楽観は出来ない、どうしますか、肚を決めますか」と問われ、「可能性が有る以上、最期まで賭けてみる」と私。

それから 8 ヶ月、途中小康状態はあったものの、結果は悲しく嫁は天に身罷った。その間、浅野さんは絶えず病状を気に掛け、色々情報や励ましの言葉を忘れない。

最初の診察で訪れた有名な T クリニック正面の高層ビルにあるレストランを指さし、治ったら「あそこでお祝いをやりましょう」と言われ、思わず嫁はニコリ。

私の「浅野観」はこの時確立した。

(六)

中国の「成功者」をご紹介頂くの旅。

浅野さんの古い友人であり、一緒に日中合作（合弁会社）を立ち上げた事もあるという中国人、現在は数十億円のビジネスを展開している方を紹介して頂く。私のビジネスパートナーにすべく、上海まで同行、案内をして頂き、先方のご家族とも会食、昔を語り合う姿から関係の深さを知る。業務提携までには至らなかったが、あの様な人物を知り合いに持つことが出来たのは、私にとって大変心強いことであった。

上海含めて、清遊の時を過ごす。古き良き時代の上海ジャズクラブ…。



映画「上海バンスキング」のモデルになったという和平飯店のジャズ楽団員は 8 人。平均年齢 80 才台という。浅野さん武芸百般に通じ、ここでもうん蓄の程を披露する。マイルス・デイヴィスからビートルズまで、実に幅広い、脱帽。ジャズを満喫した翌日、江蘇省（蘇州）寒山寺を訪う。除夜の鐘と漢詩で有名な寺である、蘇州一体に張り巡らされた水路を小舟で周遊する。

浅野さんの嚆咳に接して早 12 年。氏の歩まれた道を知り、これから目指しておられる方向を期待を込めて探りたい。

ところで、私は新幹線と通勤電車に見ることの出来る鉄道網と「医療の仕組み」が似ていると思っている。

新幹線網がほぼ完成し、在来線は新幹線との連携・連絡を深め、例えて言うなら、東京ー富山が 2 時間 7 分となり、飯能・川越から横浜中華街まで 1 本の電車で行けるようになった。1 つのリンクを付加することで、ネットワークの価値が大きく高まるような場合に、そのリンクをミッシングリンクと呼ぶ。



医療も先端技術の進歩は目覚ましく「24 時間サービス・急患を拒否しない病院」なども完成した。続いて患者の為に必要なものは、「医療制度と態勢」の整備・拡張であろう。

TPP も迫っている。

真に優秀な家庭医の育成、地域医療の充実、大中病院とのネットワーク作りも急務と思われる。新幹線拡充から既存路線との連携・活用への図式は、あながち鉄道交通世界だけのモデルではない。だがこの充実の裏側で、ブルートレインは漸次廃止の方向で消えて行く。寂しい限りである。

「旅情」などと言う言葉は辞書から消えるのだろうか…。

とまれ、浅野さんの求めるものは何か？

「野口」が 30 周年を迎えるのを契機として、改めてそれを探り、知り、学び、微力ではあるが老骨にムチ打ち、全力で協力し、頑張りたと思っている。



野口医学研究所 30周年に寄せて



米国財団法人野口医学研究所 参与会会長
医療法人社団ニコニコクラブ 理事長
安東 恭助

この度は野口医学研究所（以下、「野口」）が創立 30 周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

「野口」が今日に至るまで優秀な医師や歯科医師、看護師、その他メディカルスタッフらを海外へ留学させ、医学・医療に係るシンポジウム、セミナー等を開催し、これを支える為に野口ドクターホットライン®（医療・健康相談室）、品質推奨認定事業、人間ドック事業、サプリメント開発事業等々の医療関係事業を開発・開拓・実践し、これを大きく発展させるなど、他人の資力に頼ることなく、自主独立で医学の振興に努め、貢献を続けて来たことは尊敬に当たり、正に同慶の至りというものです。

激変の医療業界の中で、アメリカ、中国を始めとする世界的規模で「野口」を発展させた浅野名誉理事や役員の方々並びに関係者の皆様にかかれては、数多の苦勞の中、その多大なご尽力は如何ばかりかと拝察するところです。

私は 30 歳位になった頃から毎日々悩ましい事態が次から次へと起こり、ふと、人間の心と行動、病氣と精神の状態の推移に興味湧き、独学で心理学を勉強していました。そんな折、医療相談を生業とする会社、T-PEC 社との関わりが出来、その歯科領域の電話相談を引き受けることになったのです。

7 年位の月日が経った頃、同社の副社長であった萩原昌二氏（故人）から“貴方の様な人こそ野口医学研究所を通しペンシルベニア大学歯学部へ留学してみると良いと思うのだが…”と、「野口」の浅野専務理事（現名誉理事）を紹介されました。

その当時、私は私の分野である日本の歯科治療が、相変わらず“補綴”一辺倒で終わるのか、それともこれからは米国の様に“予防歯科”へ向かうのか、その将来に不安を持っていました。先ずは、米国ではどのような歯科治療が行われており、本当に予防歯科だけで歯科医師の生計は成り立っているのか？

これを知りたくて「野口」にチャレンジし、浅野名誉理事の曳きもあり、米国でも有数のペンシルベニア大学歯学部へ二度に亘り留学する事が出来たのでした。

この時の実際に目で見て、また感じた事が、その後の歯科医療に対する私の考えの基盤を確り作ってくれたのです。留学の前後を通して、浅野名誉理事とは、東京、横浜、はたまたフィラデルフィアで侃侃諤諤、喧喧囂囂、医科/歯科の将来に付いて激論を戦わせました。

この時繰り返した、討論の中身が今の私の原点と言えます。

その後気付いてみれば、「野口」顧問になり、更に「野口」の倫理審査委員会に所属し、時々、



参与会へも招聘されるようになりました。何と今は紆余曲折の結果、参与会の会長になってしまっている、という訳です。

第 18 回医学交流セミナーに於いて、初めてとも言える“歯科セッション”が執り行われ、主幹として企画・実施させて貰うことが出来ました。今後も「野口」の歯科分野のプログラムを益々充実させて行く方針が定められており、その発展が期待されます。そして、歯科医師の、歯科医師による、歯科医師の為の、国際歯学交流もより盛んになって行くものと確信しています。

とまれ、参与会主催に依る第 11 回野口国際ビジネス交流会と「野口」創立 30 周年記念行事の同時開催を迎えることが出来たことは、参与会会長として大なる慶びです。「野口」とその参与会は、今後、医療の発展のみならず、色んな産業を支える科学（サイエンス）の分野に貢献し、更にはその文化的品格を醸成する団体へと成長して行きたいと思っています。つまり、「野口」参与会を盛り立てその活動を基に科学を支援する（サイエンス）、文化・芸術と科学の融合・共存を考える（アート）、そんな組織に成りたいと考えています。



由って「野口」参与会は下記の様な憲章を設けました。

- 野口国際ビジネス交流会（参与会主宰）憲章：
1. 地球維新、人類維新、の一部を担うリーダー的組織と成る。
 2. 自然に沿ったあらゆる視点での問題解決型組織を目指す。
 3. 知恵と勇気を出し合う全員参加型の科学的チャレンジをする組織を目標とす。

いま私は、「野口」が医学・医療のサイエンスだけでなく、延いては医療のアートを考え、人の健康と幸せ全般に関わるべきフェーズ（次元）へ来ていていると考えています。

この創立 30 周年を一つの節目として、野口医学研究所ならびに関係者の皆様がますます発展されることを祈念して、ご祝辞とさせていただきます。



JADECOM-NKP 研修プログラムの立ち上げと今後の目標



東京ベイ・浦安市川医療センター センター長
[野口英世記念・野口国際医療センター]
藤谷 茂樹

現在、私は、近い将来日本の研修教育病院のロールモデルになるであろう病院の院長をしている。そして、米国の医療安全評価機構の国際版の取得を目指しており、国際標準の医療ができるような病院を目指している。野口医学研究所との出会いは、自治医科大学での9年の義務年限を終え、新たな岐路に立たされた時の1997年に遡る。米国内科研修のインタビューでは、将来日本に戻り、医学教育の推進に貢献するとありふれたキャッチフレーズでインタビューに望んだが、まさかこのようにどっぷりと教育に携わることになるとは夢にも思わなかった。野口医学研究所の新理事長に町淳二先生が就任された翌年の2009年に、学会でハワイを訪れた。その時に、野口アラムナイの結束をするためには、日本に拠点となる病院が必要であるという結論に達した。そこで、公益社団法人地域医療振興協会（JADECOM）と野口医学研究所による野口研修プログラム（NKP）が、最終目標が総合医の育成という点で共通であることからコラボすることになり（JADECOM-NKP 合同プログラム）、それから、3年で新病院が開院、今では後期研修医だけで60名、米国専門医6名もしくは米国専門科フェローシップ修了者1名と日本でも類を見ない研修病院が、短期間で立ち上げられた。同時に、JADECOM-NKP 合同プログラムは、練馬光が丘にも研修の拠点をもち、多くの研修医を指導できるようになってきた。毎週のごとく、日本全国から見学に来られる研修医や研修担当者が後を立たない。これは、30年にも渡る

野口医学研究所の脈々と受け継がれている文化や人脈の賜であり、野口アラムナイは目に見えない固い絆で結ばれている。

今では、野口アラムナイハワイ支部会、米国西部支部会、米国東部支部会と全米でのネットワークを構築しており、臨床留学をしている方々以外にも広く交流を図るようにしている。2013年10月5日には、サンフランシスコにて20名の参加者、翌日の10月6日には、深夜の飛行機に乗り、ニューヨークで同様に20名の参加者でアラムナイ会を盛大に開催した。そして、米国臨床研修医マッチ数も2012年度、2013年度とも、ともに12-3名を輩出しており、特筆すべきは、練馬光が丘から3名の米国臨床留学生を輩出したことである。

今後、JADECOM-NKP で教育した卒業生が日本で広く活躍し、日本の医学教育を換えることが要求される。米国で研修している医師のみならず、日本でも米国と変わらない教育が受けられるように今後、大海の隔たりなどなく、野口医学研究所のネットワークをさらに拡大し、日本の地域医療に貢献することを目指したい。浅野名誉理事はじめ、先人が築き上げた30年に歴史に感謝の意を表する。



野口医学研究所創立 30周年に寄せて



沖縄県立中部病院 内科
金城 紀与史

この5月に学会で13年ぶりにフィラデルフィアを訪れた。1997年から2000年にかけて内科レジデントとして勤務し生活した街である。自分がインターンの時に内科プログラムディレクターに就任したばかりだった Gregory Kane 先生はいまや内科の Interim Chairman となられ大人（たいじん）の風格を漂わせておられた。カンファレンスにも参加させてもらったが、レジデント達の若いこと！いつの間にか自分自身年を取り、研修病院で毎年新人を受け入れ何年後かには立派に成長して巣立っていくのを見守る立場になっているのを実感した。

臨床医学教育の遅れ、標準化の欠如など欠点だらけの日本でも徐々にではあるが改革が着実に進んでいるように思う。臨床研修の必修化とマッチング制度によりプライマリケアレベルの臨床力をつけ、全国の医学生が切磋琢磨しあう素地ができた。医学部の中でもクラークシップの充実やシミュレーション教育の普及など、卒業前に臨床経験を積む流れになりつつある。臨床研修を終えて帰国した方々のリーダーシップにより感染症・膠原病のセミナーが定期的で開催されたり、集中治療・総合診療の雑誌が人気を博したり、様々な書籍やDVDで発信しておられる。東京ベイで米国に準じた臨床研修を展開するまでに発展してきている。以前より臨床の面白さを若者わかりやすく伝えるようになってきたと思う。

日本の医学教育システムが整備されて留学せずとも良い臨床医になることができることが理想

的である。そのほうが語学の壁もないし、なにより日本の病院で患者のケアに貢献しながら研修をすることができる。折しも海外から米国の臨床研修に入る門はさらに狭きものになるようである。

それでも今後も若者たちが海外を目指してチャレンジしてほしいと思う。明治維新後に国を代表して先進の文明を学んでくる気負いを持ってたくさん日本人が留学して日本の近代化に大きな貢献をした。日本が先進国入りして知識や技能のギャップが少なくなったとしても留学はその魅力を少しも失わない。たとえ日本で十分に臨床研修を積むことができたとしても異国で仕事・生活することで日本の常識・非常識が異文化では全く通用しないことを体験する、驚くほど優秀な人に出会う、地道に努力してひたむきに患者と向き合う姿勢を持てば少しくらい英語が怪しくても認める懐の深さがあることなど、米国の魅力とストレスを経験することは代えがたいものだ。今後も野口医学研究所が若者の夢を応援する存在であることを祈念しております。



米国財団法人野口医学研究所創立 30 周年おめでとうございます



公益社団法人地域医療振興協会 理事長
吉新 通康

米国財団法人野口医学研究所（NMRI）創立 30 周年おめでとうございます。

この事業の創立者の浅野隆久先生、Joseph S. Gonnella 先生、佐藤隆美会長、理事長の町淳二先生、はじめ関係の皆さまのこれまで 30 年のご尽力に改めて敬意を表するとともに、心よりお祝いを申し上げたいと思います。

さて、私は自治医大の卒業生ですので、自然にへき地医療やプライマリケアに関心が向かいます。この分野は話題の先端に行く医療に比べ、解決困難な時代遅れの医療現場というイメージを自分自身で持っていました。しかしながら、野口医学研究所のご紹介でトーマスジェファソン大学、ハワイ大学を訪れ、家庭医療そして救急医療などの診療や教育の現場をみて、地域医療やへき地医療の問題は、むしろより大きなスケールでマネジメントすべき医療分野だということを知り、重要性を再認識した次第です。

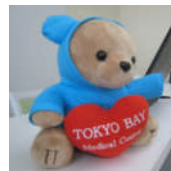
私どもの公益社団法人地域医療振興協会（JADECOM）は NMRI に日頃いろいろとお世話になっているところですが、中でも、特に 2 つの事業について感謝を込めてご紹介したいと思います。

ひとつは、JADECOM の幹部が米国でお世話になった経験を通じ、協会職員にも米国の仲間と交流の機会を持ってもらおうと考え、JADECOM と NMRI と共同でお世話になっているジェファソン大学の Japan Center を通じて実施している留学事業です。これまでこの事業を通じ 100 名近い

職員がお世話になることができました、私ども JADECOM には、50 を超える施設があり 1,000 名ほどの医師と 7,000 人を超える職員が勤務しています。もちろんへき地にも多くの運営施設があります。それぞれの施設では、医師や看護師の確保問題、質の向上の問題を抱え悪戦苦闘しています。しかし、この留学事業を通じ、職員の意識に大きな変化が出てきています。サービスの向上に職員が意識を高め、地域にあっても、米国の高い医療サービスを知りそして実際に展開できる基礎的な知見を得ることができるということは素晴らしいことで、様々な改善が始まろうとしています。今後とも、可能な限り事業を続けたいと考えています。

二つ目は、JADECOM 後期研修の一つである米国式研修プログラム JADECOM-NKP（JADECOM-野口研修プログラム）事業です。3 年前 NMRI である町淳二理事長、そして自治医大の同窓である佐藤隆美先生、藤森茂樹先生を中心に、米国式カリキュラムの JADECOM-NKP が立ち上げられました。現在 JADECOM の研修センターには 200 名近い研修医がいますが、約 60 名がこの研修を受けています。研修病院をベースとし、地域病院で一定期間研修を行う仕組みで、研修自体が地域病院の医師確保にもつながるといって大きなメリットがあります。

ここで特筆したいのは、町理事長は、毎月 1 週間、ハワイから日本に戻られ研修医の教育、指導に当たられておられることです。その努力、熱心

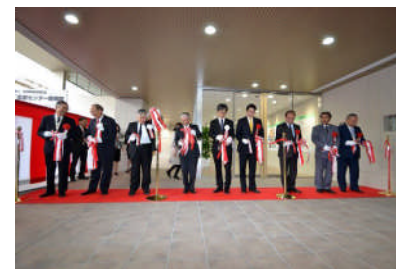


さに本当に頭が下がります。心から感謝を申し上げます。

米国ではへき地医療は家庭医療（プライマリケア）を軸とした専門医としてより強固に確立され、さらに大学ではこの分野の講座があり、医学の確立した一分野として展開をしていました。

日本でも、2017 年 19 番目の専門領域として「総合診療医」が誕生すると聞いています。JADECOM の高久会長、吉村顧問、山田常務理事も設立に関係する日本の新しい専門分野の誕生です。この分野に近い若手の医師を多く抱える協会の研修センターそして JADECOM-NKP さらに日本の地域医療にとってさらなる発展につながるチャンスとなるよう期待したいものです。

末筆ですが、米国財団法人野口医学研究所（NMRI）からの JADECOM へのご支援ご協力をお願い申し上げるとともに、NMRI が今後ますますご発展されることをお祈り申し上げます。



1983

野口英世博士の業績を記念し、フィラデルフィアに「米国財団法人野口医学研究所」設立

野口英世博士の偉業の継承と後進育成を目指し、日野原重明博士（文化勲章受賞者、聖路加国際病院理事長・名誉院長）、Joseph S. Gonnella 博士（トーマスジェファソン大学名誉医学部長）らの発案で、浅倉稔生博士（ペンシルベニア大学医学部教授）とその教え子である浅野嘉久博士（創立者・名誉理事）により設立されました。

<設立に関与した主な人物>



浅倉稔生 浅野嘉久 Joseph S. Gonnella 日野原重明



J. Michael Kenney 天野景康 尾島昭次

1990

海外駐在員・旅行者のための「24 時間電話医療相談（ドクターホットライン®）」事業開始

世界中いつでもどこからでも会員専用回線を通じて無料で利用できる、米国に在住する「野口」所属の日本人医師が年中無休で電話医療相談に応じるサービスです。

JCB、UC、VISA、Diners 等のクレジットカードや大手保険会社にこのサービスが導入され、「野口」フェロドクター一連が何人もの人達の命を救いました。



1991-

世界各国に海外「人間ドック®」開設



海外に駐在する日本人の健康管理を日本人医師や看護師がサポートし、海外在住の方や旅行・出張等で渡米中の方々が言葉の障壁に悩まされることなく利用できるような開設されたクリニック（医療システム）で

す。日米相互のメリットを生かした人間ドックシステムとして世界各国に開設を進めました。

- ①1991年 フィラデルフィア
- ②1994年 ニュージャージー（Englewood）
- ③1994年 ロサンゼルス（Little Company of Mary Hospital）
- ④1995年 ハワイ（Straub）
- ⑤1999年 北京、上海、広州（New Pioneer Group）
- ⑥2001年 サンパウロ（Santa Cruz Hospital）

<日本式人間ドック®のパンフレット（一部）>



1992

日本国内向けの「24 時間電話医療相談（ドクターホットライン®）」事業開始

日本全国いつでもどこからでも電話で医師や看護師によるカウンセリングが無料で受けられるサービスです。海外ドクターホットライン®と共に広く利用され、現在も代表的な事業の一つとして継続しています。

1989-

医学交流セミナー・選考会開催

医学交流セミナーでは、米国で活躍中の医師や留学後日本の病院にて活躍している医師達を講師として招き、米国医療の現状や留学に必要な知識等最新の情報が得られる貴重な講義並びにワークショップが行われます。又、セミナーとあわせて行なわれる選考会では、米国医科大学及び附属病院での医学研修を希望する医師・医学生等の面接試験を実施し、米国医学研修生を選出しています。



<セミナー開催史>

- ①1989年（アラムナイ総会及び基調講演）
- ②1991年（アラムナイ総会及び基調講演）
- ③1997年『米国臨床医学留学』
- ④1998年『米国臨床研修の実際と将来の展望』
- ⑤1999年『日本医学交流の現状と今後の方向性』
- ⑥2000年『米国臨床留学への道』
- ⑦2001年『日本の医療改革と日米医学交流の果たす役割』
- ⑧2002年『アメリカ留学に必要な Writing Skills』
- ⑨2003年『アメリカの臨床留学で求められる臨床能力』
- ⑩2004年『米国臨床留学で何を成し遂げるか』
- ⑪2005年『通過点としての米国臨床留学』
- ⑫2006年『アメリカ臨床留学の意義
— 日本の医学教育変革の中で—』
- ⑬2008年『国際社会に通用する医学教育
— 医療の日本における実践—』
- ⑭2009年『ジェネラリストの育成について考える』
- ⑮2010年『医学交流セミナー』
- ⑯2011年『米国臨床留学 憧れを現実に』
- ⑰2012年『米国臨床研修、そしてその先へ』
- ⑱2013年『留学のその先へ、
日本の臨床教育を変えるのは君だ』



2006

尾島昭次先生追悼シンポジウム開催

文部科学省が推進する医療人教育支援プログラムの

の一環として、尾島昭次先生を偲んで『日米の医学教育と医療を考える』をテーマとしたシンポジウムを開催しました。医師とはどうあるべきか、医学教育とはどうあるべきか等について活発なディスカッションが行われました。



1983.6	設立登記
1985.5	野口英世博士の業績を記念し、フィラデルフィアに「米国財団法人野口医学研究所」スタート。アメリカ政府から免税措置[免税コード 501(c)]等の認可を受ける
1988.7	日米医学交流の拠点「野口記念医療センター」設立
1988.10	東京都港区麻布に財団日本本部を開設
1988.10	厚生省の認可を受け、日本にも姉妹財団「日米医学医療交流財団」設立
1989.2	フィラデルフィアに米国本部を設立
1989.6	「野口英世記念医療センター」の活動を主とした日米医学交流の始動
1989.9	在米日本人医師による「野口 ALUMNI・USA」設立
1990.2	海外駐在員・旅行者のための「24 時間電話医療相談（ドクターホットライン®）」事業を開始
1990.6	海外在留邦人の健康管理を目的に「インターナショナルヘルスサービス株式会社」設立
1990.9	日米間の「看護師交流プログラム」を開始
1990.11	日本本部を東京都中央区日本橋に移転
1991.1	「野口医学研究維持会」発足
1991.5	フィラデルフィアに「人間ドック」開設
1991.6	「野口 ALUMNI・JAPAN」設立
1991.8	トーマス・ジェファソン大学、ハッパフォロー・ファミリー・ケア・センターを中心とした「野口医学交流プログラム」の開始
1992.4	日本国内向けの「24 時間電話医療相談（ドクターホットライン®）」事業を開始
1994.6	ニュージャージーに「人間ドック」開設
1994.10	ロサンゼルスに「人間ドック」開設、LCMH グループと提携
1995.5	ハワイに「人間ドック」開設、The Straub MC と提携
1995.6	日本本部を東京都港区虎ノ門に移転
1996.5	財団法人全国保健福祉情報システム開発協会、および TMC 株式会社と業務提携
1996.12	「野口英世生誕 120 周年記念インターネットホームページ」事業を開始
1997.10	「歯科部会（DENTIST ALUMNI ASSOCIATION）」設立
1998.12	医学交流セミナー・選考会開催
1998.9	財団設立 15 周年記念の催し並びに天野景康先生追悼シンポジウム開催
1999.12	医学交流セミナー・選考会開催
1999.2	中国 New Pioneer グループ（NPIMC）と提携
1999.5	北京・上海等中国 4ヶ所に「人間ドック」開設
2000.4	メディカル TV チャンネル「Care-Net」のプログラム提供を開始
2000.8	夏期医学交流セミナー実施「ペンシルベニア大学医学部」
2000.11	「健康食品 110 番」事業の開始
2000.12	医学交流セミナー・選考会開催
2000.4	従来の「セカンドオピニオン」を事業化
2000.10	野口医学研究所名古屋支部（歯科部会本部）の開設
2000.12	医学交流セミナー・選考会開催
2001.4	米国本部にてメディカルセクレタリースクール開校校務委員会発起
2001.10	サンパウロに「人間ドック」開設、Santa Cruz ホスピタルと提携
2001.11	医学交流セミナー・選考会開催
2001.12	野口ライフサポート 21 事業を開始
2002.2	第 1 回歯科部会セミナー開催
2002.6	医学交流セミナー・選考会開催
2003.3	「お客様相談室」事業の開始
2003.8	ハワイ大学に於ける医学生（M3）向けプログラム「PBLワークショップ」の作成と実施（東京大学医学部学生他）
2003.11	20 周年記念医学交流セミナー・選考会開催
2004.3	「PBLワークショップ」（全国公募）実施
2004.4	Dr.ノグチのアクティブヘルスシステムスタート
2004.7	野口メディカルプレミアムクラブ発足
2004.12	医学交流セミナー・選考会開催

2008-

日野原重明先生特別講演会開催

「野口」の創立に深い関わりのある日野原重明先生による講演会を実施しました。



野口医学研究所創立 25 周年記念式典開催

2008年12月12日、虎ノ門バ
ストラルに於いて創立 25 周
年を祝う式
典を開催し
ました。当日

は野口アラムナイを中心とした約 200 名の方々
にご出席頂き大変盛会となりました。

2009

ハワイ大学に Endowment Fund (寄附基金) 設立

Endowment Fund (寄附基金) の設立に当たり、ハワイ大学 John
A. Burns School of Medicine (JABSOM) にて調印式が行われま
した。



夏期臨床医学教育セミナー (Noguchi Summer Medical School) 開催

このセミナーでは、医学生達が積極的にグループの議論に「参加」
していく教育法 (学生による Active Learning) を目指していま
す。患者から如何にして重要な情報を得て、その情報から患者の
病態を推理し、その上で病態を証明す
るために必要な臨床検査の必然性を
説明でき、その上で正しい診断・治療
に導いていくかというアプローチを
学ぶことを主目的としています。



2010

Dr. Thomas J. Nasca 会談並びに講演会開催

ACGME (Accreditation Council for Graduate
Medical Education: 卒後医学教育認可評議会) の
CEO である Dr. Nasca を招き、1 日目には日本の
卒後臨床研修指導医と ACGME メンバーらとの会
談、2 日目には卒後医学教育のシステムと現状をテーマとした講
演会を開催しました。優
れた医師を養成するた
めにはどうすればよい
か等、活発な議論が交わ
されました。



2010-

野口国際ビジネス交流会開催

「野口」の財政を支える社団「野口」をサポートする組織として
参加があります。野口国際ビジネス交流会は、社団「野口」の
新規顧客・新規取引を生み出すこと、又、参加者同士の繋がりを持
つことを目的とし、参加者が主となり、年に 3~4 回幅広い
テーマで開催しています。



2012

創立者・浅野嘉久の古希祝賀会開催

2012年2月25日、創立者・名誉
理事である浅野嘉久が古希を迎え
ました。当日は国内外から多くの
ゲストが駆けつけ、古希を祝う誕
生パーティーを行いました。



野口英世記念・野口国際医療センター開院 (東京ベイ・浦安市川医療センター)

日本に於いて質の高い米国型医療サービスを患者へ提供する為
には、医学部卒業後の若い医師に対する臨床研修教育の可能な医
療施設が不可欠です。その目的を叶える為に「野口」は公益社団
法人地域医療振興協会 (JADECOC) と連携・帯同し、東京ベイ・
浦安市川医療センターを NKP (野口研修プログラム) 実践の場
として野口国際医療センター第 1 号としました。

※NKP (野口研修プログラム) とは…「野口」が実施している総
合診療の臨床研修プ
ログラムで、国際標
準の医療を提供でき
るジェネラリスト
(総合医) の育成を
目的としています。



中国福建省立病院看護師招聘

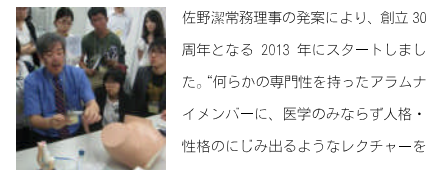
「野口」では、医療スタッフ、特に看護師や介護福祉関係の人材
不足に備え、日本と中国間の看護師交流を目的とする NPO や各
種学校と連携し、看護師の人材育成を図っています。その一環と
して、中国福建省立病院より合計 18 名の看護師を招聘し、「野口」
と深い関係にある施設を案内しました。



2013

一本勝負セミナー開催

佐野潔常務理事の発案により、創立 30
周年となる 2013 年にスタートしまし
た。"何らかの専門性を持ったアラムナ
イメンバーに、医学のみならず人格・
性格のじみ出るようなレクチャーを
丸一日実施してもらう" というもので、
正に講師と参加者との一本勝負と言えます。第 1 回 (家庭医療)
を 2013 年 6 月、第 2 回 (医学教育) を 2013 年 9 月に実施しまし
た。

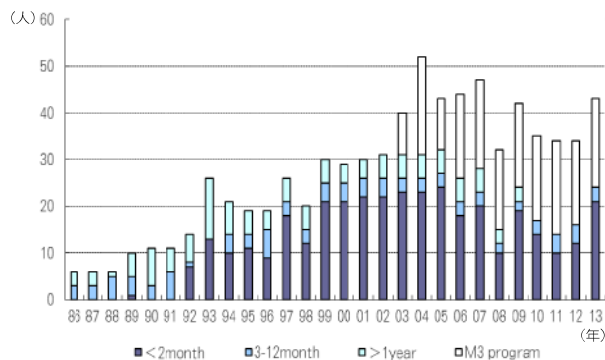


2005.3	歯科部会セミナー開催 「PBL ワークショップ」(全国公募) 実施
.12	医学交流セミナー・選考会開催
2006.3	「PBL ワークショップ」(全国公募) 実施
.8	夏期「PBL ワークショップ」(大阪市立大学医学部 学生他) 実施
.6-10	大阪市立大学医学部にて米国人研修医研修実施
.12	医学交流セミナー・選考会開催 尾島昭次先生追悼シンポジウム開催 (文部科学省: 医療人教育支援プログラム)
2007.2	NMF・NMM 発足
.3	「PBL ワークショップ」(全国公募) 実施
.7-8	大阪市立大学医学部にて米国人研修医研修実施
.8	トーマスジェファーソン大学と大阪市立大学の姉 妹校化 (提携)
	夏期「PBL ワークショップ」(大阪市立大学医学部 学生他) 実施
.12	PBL ワークショップ選考会開催
2008.2	エクスターン研修選考会開催
.3	「PBL ワークショップ」(全国公募) 実施
.6	日野原重明先生特別講演会開催
.12	財団創立 25 周年記念式典開催
	25 周年記念医学交流セミナー・選考会開催
2009.3	「PBL ワークショップ」(全国公募) 実施
	ハワイ大学にて Endowment Fund (寄附基金) 設立 ハワイ大学に於ける群馬バース大学研修プログラ ムの作成
.7	アラムナイ総会開催 第 1 回夏期臨床医学教育セミナー実施
.9	日野原重明先生特別講演会開催
.12	医学交流セミナー・選考会開催 アラムナイ総会開催
2010.3	「PBL ワークショップ」(全国公募) 実施
.7	アラムナイ総会開催
	第 2 回夏期臨床医学教育セミナー実施
.9	第 1 回野口国際ビジネス交流会開催
.12	Dr. Thomas J. Nasca 会談・講演会開催 医学交流セミナー・選考会開催 アラムナイ総会開催
2011.1	第 2 回野口国際ビジネス交流会開催
.3	「CRE・CSP ワークショップ」(全国公募) 実施
.4	第 3 回野口国際ビジネス交流会開催
.7	アラムナイ総会開催
	第 3 回夏期臨床医学教育セミナー実施
.11	第 4 回野口国際ビジネス交流会開催
.12	医学交流セミナー・選考会開催 アラムナイ総会開催
2012.2	第 5 回野口国際ビジネス交流会開催 創立者 浅野嘉久誕生パーティー・古希祝賀会 東京ベイ・浦安市川医療センター(野口英世記念・野 口国際医療センター)オープニングセレモニー
.3	「CRE・CSP ワークショップ」(全国公募) 実施
.6	第 6 回野口国際ビジネス交流会開催
.6-7	中国福建省立病院看護師招聘
.7	アラムナイ総会開催
	第 4 回夏期臨床医学教育セミナー実施
.10	第 7 回野口国際ビジネス交流会開催
.12	医学交流セミナー・選考会開催
2013.3	「CRE・CSP ワークショップ」(全国公募) 実施
	第 8 回野口国際ビジネス交流会開催
.6	30 周年記念第 1 回「一本勝負」セミナー (家庭医療) 実施
	第 9 回野口国際ビジネス交流会開催
.7	30 周年記念第 5 回夏期臨床医学教育セミナー実施 アラムナイ総会開催
.9	第 10 回野口国際ビジネス交流会開催
	30 周年記念第 2 回「一本勝負」セミナー (医学教育) 実施
.12	30 周年記念医学交流セミナー・選考会 30 周年記念第 11 回野口国際ビジネス交流会開催

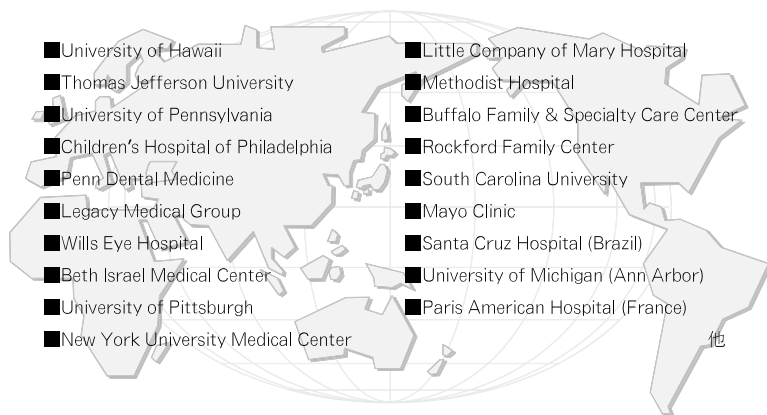
留学生の推移

毎年医学交流セミナーとあわせて開催される『米国医学研修生選考会』では、米国医科大学及び附属病院での医学研修を希望する医師、M3（医学部5年生）・M4（医学部6年生）を対象とした面接試験を行っています。この選考会で選抜された医師・学生がエクスターン研修やCRE (Clinical Reasoning Exercise) ・CSP (Clinical Skills Program) ワークショップに参加しています。

設立から現在に至るまでに送り出した医療従事者は、優に 700 名を越えています。



主な研修先



アメリカ口腔外科への挑戦



米国財団法人野口医学研究所 理事
Diplomate of the American Board of Oral and Maxillofacial Surgery
笠原 毅弘

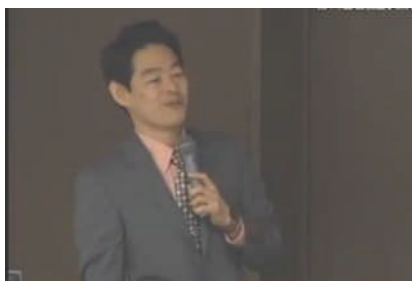
渡米してはや 13 年。当初の不安な自分を思い返すとよくここまで生き延びて来たなと感じる反面、もう少しできたのではないかと悔しさもあります。2013 年夏、20 歳の男性がバットで前頭部を殴られ、陥没骨折した外傷患者が ER に来院しました。当科がコンサルトを受け何人かが手術担当を拒否したのち最終的に私のもとにたどり着きました。再建手術が計画され、頭頂切開から前頭部にアプローチし粉碎していた骨をチタンメッシュで修復して前頭部・上眼窩縁・鼻骨を再建しました。手術中、OR に多くの看護婦たちが入れ代わり立ち代わり見学にきました。同時期、52 歳男性が菌性感染により顔面・頸部の腫脹を主訴に ER に来院、当科がコンサルトを受けました。通常通り頸部膿瘍切開を行うも術後改善をみせず、再度 CT を取ったところ膿瘍が拡大し気道および頸動脈圧迫がみられ、再度緊急切開が行われました。OR にて麻酔科が送管を何度も試みるも気道確保できず、換気できない状況に陥り、麻酔科によるエマージェンシーがコールされました。その場に居た我々チームにより緊急に喉頭切開から一旦気道を確保し、気管切開を行って無事に手術を終えました。どちらの症例も特別なものではありませんがルーティーンから逸脱したケースであり、執刀した自分に大きな成長を感じ“頑張ってきてよかった”と実感した瞬間でした。米国臨床医を夢見て 2001 年に海を渡りペンシルベニア大学に入学。2 年間の在籍の後卒業、臨床免許取得、NJ 州のレジデンシープログラムへ

と進みました。つらい 4 年のレジデンシー終了近く、ビザとグリーンカードのスポンサーになってくれる雇用主を探する必要がありました。あちこち面接に行った結果、アメリカ人に人気のないポジションに就くほうがいい条件で就職できることがわかりました。レジデンシーのプログラムディレクターから嫌みを言われながら、NJ でフランチャイズ展開しているオフィスに勤め初めました。結果的にこれが功を奏し 13 か月でグリーンカードを取得することができました。グリーンカードを取得後、フェロウシップに採用されました。セントルイスにあるレベル 1 トラウマセンターでの顎顔面再建プログラムです。子供 3 人と女房をミニバンに乗せて 3 日かけてたどり着きました。道中何度も幼かった双子達のおむつの交換を余儀なくされことを覚えております。トレーニングプログラムである以上楽である訳はなく、月半分の週末・年 6 回のメジャーホリデーはすべてオンコールでした。週末に来た顎顔面外傷に関して緊急性のあるものは一人で手術室に入ることを許されていた為いい手術経験を積むことができました。課題としていた顎関節と眼周辺の手術も多数経験でき充実した 1 年を過ごすことができました。一方、家族にとってセントルイスでの生活は辛いものでした。高くない給料で比較的廉価なアパートを選びそのおかれた環境から、女房が栽培していた植物がすべて野兎に食べられてしまったり、キッチンにネズミが頻繁に表れ食品・衣類ま



でもかじられていたり、ある晩息子がシャワーを浴びようとシャワーカーテンを開けたところバスタブにこうもりが死んでいて裸であわてて出てきたりなど動物達と近い生活を強いられました。また、活動的だった娘がベビーベッドから転落して鎖骨を骨折したり、息子が学校でトラブルを起こし校長先生から呼び出しを受けたのもこの地でした。

その後、猛勉強の末 Board Certified となり、ようやく充実感を感じられるようになってきました。祝 30 周年、私の成長を支えてくれた野口医学研究所に感謝してペンを置きます。



私のアメリカ臨床留学体験記～外科
 “Lonely” から “Alone” へ — “覚える” から “考える” へ —



札幌手稲溪仁会病院 外科
 岸田 明博

私が St. Joseph Mercy Hospital (Pontiac, Michigan) で外科研修を始めたのは今からちょうど 30 年前のことになります。同じく外科医である 5 歳上の兄からの助言と、物心ついた時から漠然と抱いていた外国への興味が、医学部 4 年生修了時に行った Berkley でのホームステイをきっかけとして、私の Holy Grail となりました。帰国後はクラブ活動(テニス)もほどほどにして、医学部 5 年生、6 年生時は ECFMG を目指して勉学に励みました。ECFMG の Certificate を受取るために近所の郵便局まで行った時のことは、その嬉しさのあまり今でも鮮明に覚えています。

真夜中の図書館で Greenbook を紐解きながら、外国人だから大学病院は無理だろうなどと疑心暗鬼におちいりながら、大規模の市中病院を中心に約 300 の施設に Application form 要望の手紙を書いたこと、Application form が送られてきたのはそのうちのわずか 20 施設であったこと、金曜日の真夜中から明け方にかけて、当時の額で約数万円もの電話代を使って 8 施設での Interview の Appointment がとれたことなど、Internet が常識の現在からすれば比較にもならないほどの無駄の中で、自らの愚行に呆れながらも、目標に向かって邁進していた当時の自分自身を誇らしく感じながら思い出しています。

Resident, Fellow そして Attending としての 10 年間はあっという間の出来事だったように感じます。米国での病棟業務を全く経験しないままに始まった Residency でしたから、全てがまず “慣れ

ること”から、そして、次は “ミスしないこと”、そして、その次が本来の目的であった “うまくなること” でした。

時間の経過とともに希薄化していく記憶の中で、より鮮明になっていく部分が最も強く影響を受けたことだとすれば、それは無味乾燥な “覚える” という学習の過程を、能動的な “考える” という過程に変容させてくれたことだと思います。ECFMG の勉強を始めた頃から、なんとなくそのような隠された意図のようなものを感じ取っていましたが、カンパレンスや回診を重ねる毎にその感は確固たるものとなっていきました。

なぜ “考える” ことが大切なのか、そして、なぜ日本の医師は “考える” ことが苦手なのか。自らの経験や目指していた目標を鑑みると、答えを見つけることは比較的容易なことでした。医学部時代を含めて、過去においては “覚える” 教育は受けていても “考える” 教育を受けていなかったこと、また、 “考える” ために必要な知識すなわち生理学などの基礎医学の知識がアメリカ人医師に比べると著しく劣っていること、そして、研修のゴールは認定医などの資格を取得することではなく “独り立ちする” ことにあるという事実でした。

知られている病気や病態のすべてを研修中に経験することは不可能です。日々の研修や症例検討会などの真の目的は、知らなかった病気を知ることではなく、問題症例に遭遇した時に自らの力で如何に解決するのか、その方法論を模索すること



だと言っても過言ではありません。自らの未熟さに起因する不安は研修医時代の誰もが感じるものです。ある程度の独り立ちが期待される上級医になればなるほど、この不安感は強くなりLonelyに感じるはず。しかしながら、独り立ちすることを常に意識しながらの研修を続けていれば、必ずや独り立ちしているというAloneの実感が芽生えてくるはず。自らの力で“考える”ことの大切さを覚悟したことにより、いかなる状況においても“Alone”の感覚で対応できるようになったことが、米国での研修で得た最大の収穫だと感謝しています。



臨床留学体験記



岐阜大学 医学教育開発研究センター
阪下 和美

野口医学研究所創立 30 周年、誠におめでとうございます。私が初めて野口医学研究所のドアを叩いたのは 2005 年、卒後 2 年目の冬でした。この時から、私は野口医学研究所から多大なるご支援を頂いて参りました。今の自分があるのも一重に野口の皆様のおかげであり、心より感謝申し上げます。

2007 年夏、私は野口医学研究所のエクスターンとして Thomas Jefferson University 小児科を訪れました。初めての海外医療機関での長期間の実習で、緊張の続く日々でしたが、現地でご指導、叱咤激励してくださった Mr. Michael Kenney、津田武先生、浅野嘉久氏のおかげで 3 週間の実習を無事に修了することができました。このエクスターン研修は、文字通り自分の転機となり、それまで「手の届かない憧れ」であった臨床留学が、「実現させるべき目標」に代わりました。

そして 2009 年 7 月、念願の小児科レジデンスーをハワイ大学で始めることになりました。その時私には 1 歳の娘がおり、育児をしながらのレジデンスーには沢山の不安がありました。ハワイとはいえ異国。子供の教育・託児・食生活…。浅野氏を始めとする幹部の皆様のご好意で頂いた 1 年間の奨学金は本当に心強く、「こんなに支えて頂いているのだからもっと頑張らねば」と、何度挫折そうになる心を救って頂いたかわかりません。

ハワイ大学小児科でのレジデンスーは、過酷ではありましたが、非常に実りあるものとなりました。豊富な症例、幅広い患者層、すばらしい同僚

と指導医達。日本では経験できないような稀な症例に触れることもできました。限られた時間で効率よく教育する・学ぶシステムにも感銘をうけました。そして何よりも、総合小児科の醍醐味に私はすっかり魅了されました。留学当初は小児救急へ進みたいと考えていたのですが、急性期の疾患だけでなく教育啓蒙も含めた予防医学も包括する総合小児科の面白さに感動し、総合小児科医として日本へ帰国する決意を固めました。

プライベートでは、レジデンスー 2 年目で第 2 子を出産し、米国で育児だけでなく妊婦生活も経験することができました。これは女性としても小児科医としても良い勉強になりましたし、二人のことも育てながらのレジデンスーという、二度とできないような無謀な試みに挑戦し完遂したことは、自分の大きな自信につながりました。2012 年夏、晴れてレジデンスーを修了し、日本へ帰国しました。

学生時代には「手の届かない憧れ」であった米国での臨床留学。自分がここまでたどり着くことができたのは、自分を助け導いてくださった多くの人ののおかげです。自分もその一員になりたいと強く願っています。現在の私の目標は、米国で学んだ総合小児科の医療と教育を日本でも実現し充実させることです。米国で学びたいという小児科医の先生のお手伝いができるよう、自分も精進する所存です。

野口医学研究所の益々のご発展をお祈り申し上げます。

留学体験記



練馬光が丘病院 内科レジデントプログラムディレクター
筒泉 貴彦

私が米国臨床留学をはじめ意識したのは医学部6年の時でした。私の出身大学である神戸大学にて1ヶ月の海外研修プログラムがあり、そのひとつにハワイ医療施設であるクアヒニ病院での見学をさせていただく機会を与えられました。当時一介の医学生であった私はそれほどの深い思慮がある訳ではなく人生経験の一環として応募しました。しかしそこでの1ヶ月の時間はこれまでの人生においても類をみない貴重な体験となったのです。米国臨床の実際を肌を感じる事で世界標準の医療を未熟な医学生であるとはいえ実感することになり、にわかに米国留学への情熱が燃え上がったのです。

臨床留学について調べているうちに野口医学研究所の存在をはじめ知りしました。幸いにも私と同じ大学卒業生である恩師、平岡栄治先生が野口医学研究所のサポートにより留学されていたため私も同様の道を歩みたいと決心したのです。

野口医学研究所のエクスターンシッププログラムに応募し、ありがたいことにハワイでのオブザーバシップにいかせていただくこととなりました。この研修期間において将来のハワイの内科レジデントとして不足ない能力があるということを確認する必要があり、前述の平岡先生を初め多くの野口医学研究所出身の先生方のサポートもあり無事ハワイ大学内科プログラムの研修医として受け入れられる事となりました。オファーのメールが来た時の瞬間は今も色あせずはつきりと脳裏に焼き付いています。

その後の3年間のハワイでの研修は本当に素晴らしい貴重な体験となりました。

留学期間中にベストレジデントに選出されたことをはじめ種々の名誉ある賞をいただきましたがこれはひとえに先人の野口出身の先生方からの貴重なアドバイスによるものと言っても過言ではありません。

現在、私はこれまでの留学の経験を生かして若い有望な医師の教育に従事しています。私がこれまで受けてきた先人達からの恩恵を今度は私が後輩達に与える事で彼らの将来を、そして日本医療の将来に少しでも力になればいいと思日々奮闘しています。

野口医学研究所設立からこれまで非常に多くの優秀な先生方が輩出されており、彼らがまた次の世代にバトンを渡してきたからこそ現在の大きな組織へと発展する事ができたと思います。現在これらの野口チルドレンは世界中で活躍されており日本の、そして世界の医療に対して非常に大きな貢献をしていることを誇りに思います。30年という長い期間を存続するのみならず発展しているということこそこの素晴らしい組織が求められていることの何よりの証明であり今後の更なる発展を願わずにいられません。私も今後微力ながら協力させていただく事ができたら幸いです。

出口のないトンネルの中の光



聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 救命救急センター
北野 夕佳

米国臨床留学をひとりで準備して目指していた時期の私にとって、野口医学研究所は、上記表題であった。

私は、1996年医学部卒業後、いわゆる日本の一般的な病院で内科系臨床医として文字通りぼろ雑巾のように働いた世代である。ひたすら実務をするなかで臨床家としての喜びと自らの成長の手ごたえを感じつつも、卒業後4年が終わるころに自分の成長が頭打ちになってきたことに焦りはじめた。この時に初めて臨床留学について真剣に調べて考え始めた。結婚、妊娠、出産などの個人的な人生設計と臨床留学という、はまりあわないパズルを悩みぬいた末、臨床留学を断念せざるを得ないという結論に自ら達した。臨床留学という可能性が自分の人生から完全に消え去ったという「失恋」状態でかなり滅入っていたのを思い出す。転機は、夫が研究留学すると言い出した2003年であった。以前に臨床留学に関して真剣に情報収集をし現実的に考えあぐねた時期があったからこそ、自分の人生で臨床留学に挑戦だけでもする機会がめぐってきたと思うと、いかに無謀だといわれようとも挑戦せずにはいられなかった。2004年、夫に一年遅れて、4ヶ月と3才の娘2人をつれて渡米した。子供たちにフルタイムの保育所を見つけ、USMLEに取り組んだ。とはいえ、ウイルス感染との闘いの年齢であり、熱を出し、夜泣きをし、夫は家事育児を7割以上強制的に分担させられ、慣れぬ海外生活で家族4人とも体力的に限界で、常に咳をしていた。浪人生活1年の

末、USMLEを取得し、ECFMG certificateを取得した。

そして、本当の困難はここからであった。IMG（いわゆる外国人応募者）が、地理的制約のある状態でマッチングに望むのは困難といわれていたとおり、応募したプログラムほぼすべてから、invitation regret（インタビューを断られる手紙）が即日に来た。このままECFMG certificateを取得しただけで、アメリカで主婦をして帰国するのかなと思うと、悔し涙が出た。もし今年マッチしなかったらどうするのか。来年度のマッチングに向けて自分をより強いapplicantにしなければならぬ。どうするのか。多くのレジデントプログラムの応募ホームページには、米国でのextern経験を重視すると書いてある。Externになるにはどうすればよいのか。複数のレジデントプログラムに直接連絡を取り交渉した。日本の上司や医局を介しても手を尽くした。しかしexternは、患者との実際の接触（問診、診察、オーダー入力、カルテ作成）があるため、診療行為に対するLiability Insuranceを（米国の医学生であれば母校の医学部が）かけているからこそ可能になることであって、私のような一外国人応募者に認められるものではない、それは熱意や能力などでovercomeできる種類のものではない、というのが交渉し尽くした後に私が直面した現実であった。

出口のないトンネルの中だった。IMGがマッチすることの困難さを痛感した。野口医学研究所のことを調べた。野口のプログラムを介してなら



extern ができる道があることをこの時に知った。うれしさに息が止まりそうになった。2005年12月の医学交流セミナー・エクスターン研修生選考会に、米国から日本に一時帰国して参加した。私が米国で1人で悩みつつ進んできた同じ道を先に歩いてこられた偉大な先輩たちに何人もお会いでき、あと少しだからと励ましていただいた。次年度のexternに選んでいただいた。セミナーで初めてお会いした米国でfacultyとして活躍しておられる日本人の先生が、”You are ready to match this year.”と、強い推薦状を書いてくださり、それもERASに提出した。出口のないトンネルの中の、本当に光だった。

結果的には、その年に奇跡的にVirginia Mason Medical Centerにマッチし、野口を介したextern

は行わなかった。しかし、私がマッチしたのは宝くじに当たったようなものである。野口が経済的に組織的に脈々とサポートしてくださるexternプログラムなどがあるからこそ、日本人がexternをする道が開け、マッチする道が開け、臨床留学した人材が続々と帰国しているのだと、本当に思う。正しい志を持った大きな組織のありがたさと力強さを、心底から感じている。帰国後4年になるが、米国内科臨床留学で得てきたものを日本の臨床に微力ながら還元しつつけてゆくことが野口への恩返しだと思っている。

野口医学研究所創立30周年記念を、こころよりお祝い申し上げます。そして野口医学研究所という存在に、こころから感謝いたしております。

2013年10月吉日



私の臨床留学体験記



聖路加国際病院 一般内科
堤（滝澤）美代子

留学の経緯：

後期研修で、当時新しく出来た、大学病院の総合診療内科を選んだ。そこで、アメリカで家庭医療を学んできた指導医（現千葉大学総合診療部の生坂政臣教授）から指導を受けた。その幅広い守備範囲を目の当たりにして、家庭医療というものを勉強してみたいと考えるようになった。2001年当時日本に、家庭医療の研修プログラムが、ほとんどなかったのだが、「日本にいながら家庭医療をローテーションできるという」沖縄米海軍病院を受験し採用された。

野口との関わり：

海軍病院インターンのとき、エクスターンの面接を受けた。

面接の際、USMLEを受験していない私に、佐藤隆美先生が、「これからUSMLEの勉強、面接、マッチング、家庭医療の研修、と道は長いですね、それは自覚していますか。」と聞かれ、「はい、1年以内にstep 1,2を受験し合格します。」答えた。佐藤先生も、「甘くないですよ。」と苦笑いしていたが、「頑張ってください。」とおっしゃった。12月末、合格通知が来た。レジデンシーへの道が目の前にパッと開けたような気がした。アイオワ大精神科で指導医（Associate Professor）をしている海軍病院同期の篠崎さんと「僕達もアメリカでレジデンシーができるかもしれない、頑張ってみようよ。」「本当にそうだね。」と話したことを覚えている。

翌年秋、私はハワイで、篠崎君は、TJUでエクスターンをした。

ハワイでのエクスターン：

ローテーション始めに、家庭医療志望であることを伝えた。内科チーフレジデントのアドバイスに従い、通常はクアキニ病院内科3週間のところを1週間に、Dr. Tokeshi とのrotation、1週間を3週間にすることにした。卒後数年がたったいが、この3週間は、医師として大事な哲学、基本の姿勢を学ばせてもらい、私にとって「一生の宝」となった。Dr. Tokeshi は、筋金入りの家庭医で、赤ちゃんから老人までたくさんの患者さんを抱えていた。患者さん想いで、自分の事、（恐らく）家族の事も、いつも二の次、24時間365日つねにon call、入院、急変があれば、いつでも、病院に駆けつけて、自分自身の目で患者さんを診て、判断していた。自己犠牲を苦としておらず、もちろん、患者さん、家族からも絶大な信頼を受けていた。

緊急時には、エクスターンである私や日本からの医学生にもコールしてくれた。HIPPA（患者さんの権利、個人の保健情報、医療過誤などの問題）で、「診療に直接携わることはできない。」と言われていたのだが、先生のsuperviseのもと、外国人の私に、患者さんへの問診、診察、カルテ記載、処方箋書き、入院サマリーのdictationもさせてくれ、彼が最後にco-signしていた。この時の経験は、その後のレジデンシーでどんなに役に立っ

たかわからない。
剣道、居合道、茶道もされ、普通の日本人より日本人の精神を持っていた。私は、幸か不幸か学生時代剣道部で剣道を10年やっていたため、早朝からの回診でフラフラだったが、毎週道場に通った。どこにそんな時間があるのか、最新の知見にも精通し、お手製教科書“Dr. Tokeshi Manual”に最新情報を常にアップデートしていた。

ずっと先生の指導を受けたいので、「先生、人間らしい生活をしながらいつまでも元気に診療されてください。Please take care of yourself, don't work too hard! You need your own life.」

と言ったら、「僕の人生は、太く短くていい。」とおっしゃった。「先生は60代、もう短くないですよ、細く長く、いつまでも元気でいてください。」と口答えしたら、苦笑いされていた。

「いつかあになりたい。」と思う一方で、「どんなに頑張ってもDr. Tokeshiのようにはなれない、真似できない。」と思うのだった。

ホスピタリストが主流となっている今も、休暇中以外は自分の患者さんは自分で入院管理しているそうで、家庭医として、生きたお手本のような先生である。

留学の実際；

ハワイでのエクスターン後、ヴァージニアで1ヶ月見学実習をし、そこで大変よい評価を得る事ができ、インタビュー後、マッチした。

1年目は、地球の裏側のアメリカ東海岸でインターンをした。家庭医療特有の内科、小児科、産婦人科と次々変わるローテーションのため、毎月新しい環境に慣れるのが大変だった。夫を日本においての単身赴任、カルチャーショック、ホームシックからか、軽い鬱状態を伴う適応障害に陥った。信号や天気予報を観て涙が止まらなかった。指導医や、同僚達にも恵まれていたのだが、悩んだ末、2年目から、空きの出たハワイの家庭医療に移った。

この時は海軍病院の指導医、Dr. Tokeshi にも、いろいろと相談した。

ハワイでの2年間は、うまく気分転換するように心がけた。アジア人にとってハワイは、食べ物に恵まれていた。週末は、同僚とノースショアで飲んだり、海に行ったりしていた。

毎週木曜日はスケジュールの許す限り、クアキニ病院で行われていた Dr. Little の presentation class に出るようにしていた。彼女は、ボランティア精神に富んでおり、人間としても女性としても、私はとても尊敬している。

帰国した現在、留学の経験をどのように生かして行くか；

「家庭医療を日本に持ち帰り、広めます。」とレジデンスを始める際に、面接をした指導医達に意気揚々と話したのだが、今、実行できているだろうか。

家族が増え、子供に振り回され、正直、仕事中心の生活ではないが、日本で家庭医療、プライマリケアをどのように実践するか、日々試行錯誤している。

家族みんなのことを知っているクリニックで親子の健診、祖父母の通院もできたら楽だろうし、風邪の子供が中耳炎で小児科から耳鼻科に行かなくていいように、

腹痛の女性が内科、婦人科、外科とたらい回しにならなくていいように、

「検査で異常ありません、心療内科に紹介しません。」と言わなくていいように、

「bio-psych-socio に基づいた、身体疾患に偏らない家庭医療のエッセンスを若い医師達に伝えられたらいいなあ。」と、考えながら、診療している。

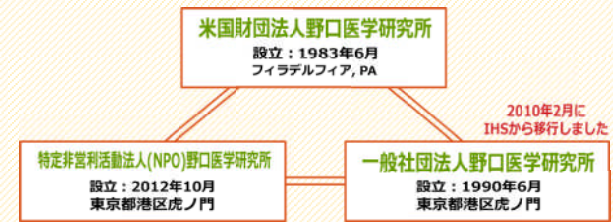
日本の医療を変える道のり、総合診療への道のりは険しい。

これが、佐藤先生が野口の面接時におっしゃっていた「道は長いですよ。」の意図する所なのだろうか。

寄附に一切頼らず独自に奨学金を捻出するユニークな

米国財団法人野口医学研究所の活動を支える 一般社団法人野口医学研究所の事業

財団「野口」は寄附に頼らない独立経営財団であり、その活動は、野口アラムナイ（野口フェロー同窓会）を中心とするボランティア活動や、外郭団体並びに法人の協力により支えられています。



米国財団法人野口医学研究所の外郭団体として、財団「野口」の活動を資金面から支援しているのが一般社団法人野口医学研究所です。

千円札と同じ野口英世博士の顔写真を商品や宣伝に独占的に使用できる唯一の企業として、その優位性を存分に活用しながら、医療や健康に関わるサービスの提供や健康関連商品の製造販売を行ない、皆様の健康と医学の発展に貢献しています。

<代表的な事業>

○コンサルテーション事業

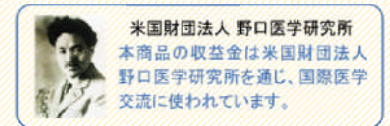
24 時間対応の医療電話相談サービス「ドクターホットライン®」

栄養・健康相談代行サービス「お客様相談室」

○認定事業

「品質推奨」並びに「野口ゴールドコレクション」

社団「野口」の収益金の一部が財団「野口」を通じて、国際医学交流に使われています。その証として商品やサービス等全ての事業に於いて下記のような文言が謳われています。



○製造販売事業

「新健康活力製品」シリーズに代表されるサプリメントの製造販売、「キダ」や「森の洗い粉」等化粧品品の製造販売

○受託・代行業

「臨床試験の受託」並びに「保険調査や意見書作成」



社団「野口」写真集

2010年12月 忘年会



2012年2月 バースデーパーティー



2012年8月 屋形船納涼会



2012年9月 澤田崇志65歳祝賀パーティー



2013年6月 社員旅行@韓国



2013年9月 社員旅行@日光・佐野



To be continued...



野口英世記念・米国財団法人野口医学研究所 創立30周年記念誌

発行日 2013年12月7日発行
発行者 浅野嘉久
発行所 米国財団法人野口医学研究所
編集 〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-22-13
電話 03-3501-0130
米国財団法人野口医学研究所創立30周年記念誌編集委員会